

と
こ
は
と
こ
は

第 36 号
2 0 2 3

常葉大学外国語学部言語文化研究会

表紙の題字は木宮健二理事長

目次 (簡略版)

I	巻頭言	1
II	外国語学部共通	3
	1. 教員エッセイ	5
	2. 外国語学部コロキウム	20
	3. 外国語学部文化講演会	26
	4. 特別研究の題目	28
	5. 日本語教員養成課程の活動報告	35
	6. 学内外での教職員や学生の取り組み	40
III	英米語学科	43
	1. Tokoha University English Speech Contest	45
	2. 高校生対話弁論大会	47
	3. 教員採用試験合格者	49
IV	グローバルコミュニケーション学科	55
	1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)	57
	2. 多言語レシテーション大会	59
	3. 社会人基礎力養成	72
	4. 臨地実習	77
	5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み	82
V	各言語圏での活動	95
	1. スペイン語圏	97
	2. ポルトガル語圏	100
	3. 中国語圏	112
	4. 韓国語圏	115
	5. 上記 5 言語以外の言語圏	116
VI	卒業生	119
VII	退職者	123
VIII	外国語学部言語文化研究会	129
	編集後記	132

目 次

I 巻頭言	
蒼天不負有心人—All things come to those who wait.戸田 裕司.....	1
II 外国語学部共通	
1. 教員エッセイ	
1-1. ブラジル文学に描かれたイタリア移民.....江口 佳子.....	5
1-2. 特別研究・卒業研究の成果を巡って(その1).....山田 昌史.....	10
1-3. 2022年夏台湾でのフィールドワーク： 日本漢学が鄭成功と木下彪をつなぎそう.....若松 大祐.....	15
2. 外国語学部コロキウム	
2022年度外国語学部コロキウム.....	20
3. 外国語学部文化講演会	
外国語学部文化講演会.....清 ルミ.....	26
4. 特別研究の題目	
4-1. 英米語学科卒業研究題目一覧.....	28
4-2. 2022年度グローバルコミュニケーション学科特別研究 共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧.....	31
5. 日本語教員養成課程の活動報告	
5-1. 正しく伝えるための日本語.....水野 元葉.....	35
5-2. 想像力と思いやりが不可欠.....谷崎 遥.....	38
6. 学内外での教職員や学生の取り組み	
東アジアサマースクールに参加して学んだこと.....池田 真理奈.....	40
III 英米語学科	
1. Tokoha University English Speech Contest	
The 2022 Tokoha University English Speech Contest.....	45
2. 高校生対話弁論大会	
第38回静岡県高等学校英語対話弁論大会報告.....	47
3. 教員採用試験合格者	
3-1. 夢の実現を可能にしてくれたもの.....粕谷 怜杏.....	49
3-2. コツコツは勝つコツ —誰にでも誇れる英語教師になるために—.....森 双葉.....	50
3-3. 教員採用試験受験を通して学んだ3つのこと.....渡井 万智.....	52

IV グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

海外事情談話会	57
---------	----

2. 多言語レシテーション大会

2-1. 第9回多言語レシテーション大会	若松 大祐	59
2-2. レシテーションを体感しよう	戸田 裕司	64
2-3. 「暗唱」、AI時代だからこそその魅力	谷 誠司	65
2-4. 失敗を恐れずに	栗原 菜摘	66
2-5. 苦手な事にも挑戦	戸崎 さくら	68
2-6. 挑戦のその先の景色	鈴木 桜子、堤 彩華	69

3. 社会人基礎力養成

静岡が抱える社会課題の解決に挑戦した学生たち	谷口 茂謙	72
------------------------	-------	----

4. 臨地実習

4-1. 臨地実習の概要	77
--------------	----

4-2. 臨地実習 A

はあとふる Yaizu における多文化共生推進活動	増井 実子	78
---------------------------	-------	----

4-3. 臨地実習 B の概観	清 ルミ	81
-----------------	------	----

5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

5-1. 田舎娘は、キャリアウーマンに憧れる	湊 佑紀奈	82
5-2. 人は分類したがる	小泉 杏果	85
5-3. 歓迎聆聴：2022 年度公開講演を実施して	若松 大祐	91
5-4. ポルトガル語での読み聞かせ	植松 マユミ	93

V 各言語圏での活動

1. スペイン語圏

1-1. 2022 年度のスペイン語圏関連の活動報告	増井 実子	97
1-2. インテルカンビオで得た気づき	間嶋 柚月	99

2. ポルトガル語圏

2-1. 2022 年度のポルトガル語関連の所感	江口 佳子	100
2-2. ポーランドの芸術家たちがみるウクライナ	清水 理那	102
2-3. 限られた時間の中で	村田 圭花	103
2-4. 「ふつう」ってなんだろう	藤田 唯奈	108
2-5. 「歌の力」を通じて伝えたかったコミュニケーション	森下 莉紗	110

3. 中国語圏	
2022 年度の中国語圏における研修	若松 大祐 112
4. 韓国語圏	
2022 年度の韓国語圏での研修の実施報告	崔 慶原 115
5. 上記 5 言語以外の言語圏	116
VI 卒業生	
卒業生の声を聞く	121
現役学生から学ぶ日々	石間 海帆 121
社会人になってからの貴重な経験	鈴木 美央里 122
VII 退職者	
清ルミ先生	125
鈴木克義先生	126
柴田里実先生	127
VIII 外国語学部言語文化研究会	
『とこはことのは』36 号の編集の現場	130
編集後記	132

I 卷頭言

巻頭言

蒼天不負有心人—All things come to those who wait.

外国語学部長 戸田 裕司

外務省「海外安全ホームページ」に拠れば、2023年1月1日時点で、日本政府は新型コロナウイルス感染症に関して、ワクチン接種証明またはPCR検査陰性証明の提出を求めているが、それ以上の入国制限をしていない。また、日本からの入国者に入国制限を課している国は115か国にのぼるが、ワクチン接種証明の提出以上の制限（入国後の行動制限など）を実施している国はほとんどない。海外プログラムを実施している国の大半では、ワクチン接種状況の確認さえ不要である。

外国語学部でも、2022年度からは長期留学・ショートプログラムおよび大半の海外語学研修を再開することができた。2023年度は留学・語学研修以外の海外実施科目についても再開できるものと見込んでいる。

言うまでもなく外国語学部の教育において留学・語学研修や海外実施科目は大きな柱である。この重要な科目群が2019年度末から休眠状態となったことは、学部教学にとって大きな痛手であった。これらの科目に魅力を感じ、参加を期していたであろう学生の皆さんが大いに失望したであろうことは、想像に余りある。

では2020年度以来の“外国へ行けない外国語学部”の時代は、私たちにとって停滞と閉塞に塗りつぶされた暗黒の時代であったのであろうか。私は全くそうは思わない。

この間、多くの外国語学部生は、県内自治体と連携しての在住外国人への生活情報提供支援・外国人児童への多言語読み聞かせ・日本語教室の学習支援など、幾つもの地域課題に取り組んできた。学生たちは、…そして私たち教員も、外国語の技能や異文化の知識が、個人が遠い海外で活躍するためだけではなく、私たちの身近にある地域の問題解決に貢献するためのツールであることを改めて認識することができたのではないだろうか。

私は2015年度から2年間グローバルコミュニケーション学科長の任にあった時、当時の西頭徳三学長より「外国語学部が果たす地域貢献を考えてくれ」と強

く要請されていた。実際のところ、当時のグローバルコミュニケーション学科や外国語学部には他にも取り組むべき課題が多く、私は西頭学長のご退任までに答案を出すことができなかった。

図らずも、コロナ禍の中、多くの外国語学部の学生・教員が地域での活動を模索し、成果を上げてくれたことで、私もようやく答案を書き始めることができた。答案を書き終えるには、このような学生の皆さんの積極性を、学部の正課・成果外の教育体系の中に取り入れ、位置付けていく必要がある。

コロナは、外国語学部の新たな方向性を切り開いてくれた。そして、その方向性は、私たちが「でも何かをしたい」という意思を持っていたからこそ得られたものである。ウィズ・コロナの外国語学部もかくありたい。

II 外国語学部共通

1. 教員エッセイ

ブラジル文学に描かれたイタリア移民

江口 佳子

ポルトガルによる植民地時代 (1500 年～1822 年)、熱帯のブラジルでは、先住民、欧州人、黒人の三つの人種によって社会が構成された。そして、文化の基盤は、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの三つの大陸文化の融合と修正により形成された。ただし、植民地支配下であったため、人種と文化の混合は、ポルトガルのそれが優位であり、決して平和裡に形成されたものではなかった。

人種と文化面におけるブラジル社会の転換期は、19 世紀末から 20 世紀初めに生じた。欧米からもたらされた自由主義思想や資本主義社会の発展が契機となり、世界最大の奴隷輸入国であったブラジルの奴隷貿易は 1850 年に禁止され、1888 年に奴隷制そのものが廃止された。しかし、同時に、コーヒーの国際需要が高まっており、奴隷に代わる労働力の確保が急務となっていた。そこで、ブラジルは、帝政末期から第二次共和政にかけて、外国人移民政策を導入した。二つの世界大戦も相まって、1850 年から 1947 年までの約 1 世紀の間に、世界中から総数約 500 万人の移民が流入し、多民族・多文化国家が形成された。その多くがヨーロッパ諸国からであり、国籍別でみると、1 位イタリア人 (約 150 万人)、2 位ポルトガル人 (約 146 万人)、3 位スペイン人 (約 59 万人)、4 位ドイツ人 (約 25 万人)、5 位日本人 (約 19 万人)、6 位ロシア人 (約 12 万人、現在のウクライナ人も含まれる) である。注目に値するのは、3 世紀に亘り宗主国としてラテンアメリカ地域を植民地支配したポルトガル人やスペイン人よりもイタリア人の方が上回っていることである。当時のイタリアは、同時代の日本の状況と似ており、狭い国土で農業に適した土地が限られており、人口増による余剰労働力を海外へ送り出した。イタリアが移住先としてブラジルを選んだ理由には、宗教が同じカトリックであったことも大いに関係している。

ブラジルのコーヒー経済は 1850 年代から 1920 年代に急成長し、とくに内陸部にコーヒー農園を擁したサンパウロ州は莫大な利益を上げ、サンパウロ市は工業化を進め、大都市へと急成長する。こうして、サンパウロは、ブラジルの首都リ

オデジャネイロと並び、ブラジルの政治、経済、文化の中核を担うようになる。

ブラジルに流入した移民の大半は、コロノ（契約労働農民）として雇われるが、農園の劣悪な労働環境を嫌い、都市で工場労働や商業に従事する者も増加する。とりわけイタリア移民は、1920年代には州都サンパウロ市の人口の16%を占め、言語や習慣の文化面で新たな影響をもたらしたとされている。

これらを背景に、本稿では、ブラジル文学に描かれたイタリア移民について紹介する。アウカーンタラ・マシャード(1901-1935)は、急速な多文化が進行したサンパウロ社会をいち早く描いたブラジル人作家である。マシャードはポルトガル人の名家出身で、曾祖父は5つの県を統括する知事、外交官であり、祖父と父親はサンパウロ大学法学部教授で、コーヒー農園主でもあった。マシャードも卒業後は、祖父や父親のように法律の道に進むことを家族から囑望されていたが、在学中からジャーナリズムに強い関心があり、1923年に法学士を取得するものの、サンパウロの新聞社の編集者となった。

おりしもブラジルでは、国家の近代化には、ヨーロッパ文化の模倣ではなく、文化的依存からの脱却が急務であるという機運が高まっていた。画家、音楽家、作家等の芸術家が集い、1922年にサンパウロで「近代芸術週間」が開催され、これを契機に文化運動モデルニズモが勃興した。マシャードは、その運動の中心的存在であった音楽家であり作家でもあるマリオ・ジ・アンドラージと親交するようになり、モデルニズモの文学雑誌にも寄稿を始めた。その後、1925年にポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、イギリスを外遊し、その旅を基にした紀行文学『パテベビー』(*Pathé Baby*, 1926) [パテベビー：フランスのパテ社が製造した小型映写機] を発表し、作家としてデビューする。

翌年の1927年に上梓した短篇集『ブラス、ベシーガ、バハ・フンダ』(*Brás, Bexiga, e Barra Funda*, 1927) はイタリア移民をテーマとしている。タイトルはイタリア移民が多数居住していたサンパウロ市内の地区名である。ブラスには、イタリア移民と共に他国からの移民者も多く、貧困層の低賃金工場労働者が居住した。ベシーガとバハ・フンダは商業地区であり、相対的に安定した生活を営む移民が集まっていた。

本短篇集は11の短編小説から構成され、作者による序文が付されている。

II. 1. 教員エッセイ

Este livro não nasceu livro: nasceu jornal. Estes contos não nasceram contos: nasceram notícias. E este prefácio portanto também não nasceu prefácio: nasceu artigo de fundo.

この本は本を生み出したのではなく、新聞を生み出した。これらの短編小説は短編小説を生み出したのではなく、ニュースを生み出した。したがって、この序文もまた序文を生み出したのではなく、論説を生み出した。

つまり、フィクションではあるが、現実社会を映し出した物語であると述べている。さらに、ブラジルの国民形成についても言及している。

Durante muito tempo a nacionalidade viveu da mescla de três raças que os poetas xingaram de tristes: as três raças tristes.

長い間、民族意識は、詩人たちが“悲しい三人種”と、“悲しい”と蔑称した三つの人種の混合であった。

19世紀後半から20世紀初めのブラジルのエリート層の間では、ブラジルに外交官として滞在したアルテュール・ド・ゴビノー伯爵による人種不平等論が流布し、混血社会は劣等であると考えられていた。文学の分野でも、フランスの実証主義に影響を受けた高踏派が上流階級の間で人気を博していたが、その高踏派の詩人オラーヴォ・ビラキ (Olavo Bilac, 1865~1918) の「ブラジル音楽」(“Música Brasileira”, 1919) と題する詩の中では、ブラジル音楽を「至上の情熱」(o fogo soberano) と称えながらも、それは「不純物の魅力」(encantos de impureza) と表現している。

E em nostalgias e paixões consistes, ノスタルジーと受難から成る
Lasciva dor, beijo de três saudades, 官能的な苦痛、三つのサウダージの口づけ
Flor amorosa de três raças tristes. 悲しい三人種の愛の花

“悲しい三人種”の受難と苦痛の結合がブラジル音楽であると詩人が謳っている。作家マシャードはこうした詩人の歴史観を踏まえ、序文でイタリア人移民を

こう評している。

Então os transatlânticos trouxeram da Europa outras raças aventureiras. Entre elas uma alegre que pisou na terra paulista cantando e na terra brotou e se alastrou como aquela planta também imigrante que há duzentos anos veio fundar a riqueza brasileira.

そこに、大西洋横断定期船がヨーロッパから他の冒険的な人種を連れてきた。その中に、陽気な人種がいて、歌いながらサンパウロの地に足を踏み入れ、その土地で芽を出し、200年前にブラジルの富を築きに来て、やはり移民であったあの植物のように広がった。

短篇集には様々なイタリア人移民が登場するが、通底するのがイタリア人移民のブラジル社会への統合である。そのうちの一つ「社交界」“Sociedade”は、近代化による社会の変化によって、落ちぶれつつある名家出身のポルトガル人一家と、新興企業で財を成すイタリア人移民の物語である。登場人物は、ポルトガル人一家（ジョゼ・ボニファッショ夫妻と娘テレザ・ヒッタ）とイタリア人親子（父サルヴァトーレ・メッリ、息子アドリアーノ・メッリ）である。若い二人は恋愛関係にあるが、物語の冒頭は、テレザ・ヒッタの母親の「娘はイタリア移民の息子などと結婚するものですか！」で始まる。ポルトガル人夫婦は、野菜の行商人をしていたことがあるイタリア人親子を侮蔑しており、そのようなところに娘を嫁がせたくない。しかし、家計は貧しく、ジョゼ・ボニファッショが所有する土地から得られる収入はわずかである。一方のイタリア人のサルヴァトーレ・メッリは、織物業の起業家として成功しつつあるが、社会的なステータスがない。メッリは、サンパウロの“社交界”に入会して、社会的地位を得たいと考えている。そこで、名家と資本家の双方の利害が一致して、二人の恋愛は認められ、結婚する。

このようにストーリーはいたって典型的な政略結婚であり、人物の性格も経済状況にリンクして単純化して描かれており深みがない。物語の展開も早く、場面のつなぎ合わせであり、作家が映画の場面展開の手法を取り入れたかのようである。また、他の短編小説でも同様に、イタリア移民がイタリア語とポルトガル語

II. 1. 教員エッセイ

を混ぜた言葉で発話する。サンパウロのポルトガル語は、イタリア人移民の訛りが影響しているとされており、その発端となった当時の状況も伺い知ることができる。

最も興味深いのは、若い二人のデートの描写である。二人は、19世紀末から20世紀初めにブラジルで流行していた“マシッシ”と呼ばれるダンスを觀賞しに劇場へ行く。マシッシはブラジル版タンゴと呼ばれ、ポルカ（チェコの民俗舞曲）、ハバネラ（キューバの民俗舞曲）、アンゴラのアフリカ奴隷がもたらしたルンドゥーが融合した、挑発的で官能的な円陣を組んで踊るダンスである。演奏家の多くは元奴隷のアフリカ系黒人であり、中産階級の中でも下層に近い人々の前で演奏されていた。語り手が「踊り手たちはペアになって体をくっつけてマシッシを踊っていた。サロンの真ん中は、無秩序だった。分別に欠けた人々、醜い女たち、うんざりするような男たち。黒人の楽団は演奏を鳴り響かせていた。声と音の歓喜。満足した拍手がマシッシの踊りを長引かせた」と描写している。

ブラジルは、後にジェットゥリオ・ヴァルガス大統領（1930年～1945年、1951年～54年）が、ナショナリズムを高揚させるため、混血に対する劣等感を払拭させようと、外国人移民の文化を含めた混血文化を称賛し、人種不平等論を180度転換する政策をとる。作家アウカーンタラ・マシャードの『プラス、ベシーガ、バハ・フンダ』（1927年）はブラジルが多民族・多文化社会を進行させる移行期に書かれた作品である。多様な文化の交差における、人間の心理・行動の変化が描かれており、今日の現代社会においても興味深い視点である。

—参考文献—

Machado, Antônio de Alcântara. *Brás, Bexiga, e Barra Funda*, São Paulo, Saraiva, 2009

伊藤森仁、住田育法、富野幹雄『ブラジル国家の形成』（晃洋書房、2015年）

マッガワン、マッガ『ブラジリアン・サウンド』（シンコー・ミュージック、2000年）

特別研究・卒業研究の成果を巡って (その 1)

山田 昌史

大学 4 年間の学修成果として作成する卒業研究の多くは、日の目を見ずにそのままにされてしまうことが多い。それぞれの研究でなされた重要な発見や分析が表に出ずに埋もれてしまうことは大変残念なことである。そこで本稿では、2015 年度以降、筆者が指導した特別研究 (2020 年度からは卒業研究) の中から優れた研究成果について紹介しながら、その発見に学術的意義を見いだしていくことを目的とする。特に第 1 回目¹の本稿では、日英語の表現を対照した研究成果の中から 3 編の論文を取り上げる。

まず、遠藤 (2018) の日本のアニメ『君の名は』の日本語セリフとその英語字幕の対照研究で指摘された言語事実を紹介する。

高木：迷った？	You got lost?
瀧：うん	Yeah.
高木：お前さあ、どうやったら通 学で道に迷えんだよ？	How could you get lost on the way to school?
瀧：ああ えーと <u>わたし</u> ...	Uh... Well... I (<u>watashi</u>)
高木：わたし？	Feminine?
瀧：あ <u>わたくし</u>	I (<u>watakushi</u>)!
高木・司：ん？	
瀧：ほく	I (<u>boku</u>)?
高木・司：はあ？	
瀧： <u>俺</u> ？	I (<u>ore</u>)?
高木・司：うん	

(遠藤 (2018) : 13 下線は筆者による)

このシーンは、ミツハという女子高校生に入れ替わっているが、姿は男子高校

¹ 本稿は「その 1」であるが、「その 2」以降も執筆していきたいが、次がいつになるのかは筆者にも不明である。

II. 1. 教員エッセイ

生の瀧が、入れ替わって初めて瀧の友人と会話するシーンである。瀧が普段どんな自称詞を使っているのか分からないミツハは瀧の友達に向かって「わたし」「わたくし」「僕」「おれ」と様々な自称詞を試している。この場面の英語字幕は、全て代名詞のIが用いられ、カッコ内にアルファベットで日本語の読みが加えられている。ここには、自称詞Iが日本語セリフでは多様に使われていることを訳すために苦心しているさまがみてとれる。この遠藤が発見した事実は、日本語の自称詞の多様性と使用される自称詞によって使用者の「キャラ」が決まることを研究する日本語の役割語や「キャラ」概念についての研究 (cf. 金水 (2003)、定延編 (2018) 等) につながる重要な発見である。

次に、疋田 (2017) が『劇場版ポケットモンスター ミュウツーの逆襲』から観察した例を紹介する。以下は、映画冒頭のシーンである。

A: 幻のポケモン。ミュウが神秘的な力を持ち、大洪水を引き起こしたとか荒地に作物を実らせ人々に分け与えたとか、様々な伝説が語り継がれています。

B: 天使か悪魔か、気まぐれなだけか。

A: 永遠の命があるとも言われています。

B: しかし絶滅したんだろう？

A: ところがミュウを見たという話は最近になっても報告されています。

B: 確認はされていない。まともな写真1枚取られていない。

A: ミュウです。そして、これが今回発見された化石です。ミュウの体の一部ではないかと。

B: 早速研究所に持ち帰ろう。もし、本当にミュウの化石だと

August 6th. Today my colleagues will research the site where ancient civilization may have created a shrine to *Mew*, the most powerful *Pokemon* to have ever existed now believed to be extinct. Giovanni's financing the expedition, when he learned that my works in the field of cloning he agreed to find my research.... but only if I would try to create for him an enchased living replica of *Mew*. I had to agree. All he wants is to control the most powerful *Pokemon* the world's ever known. I of course want something more, much more. *Mew*. Our team is bringing back what we believed to be a *Mew* Fossil. I pray it's authentic. If so, I may finally have the DNA I need to create the

すれば。最強のポケモンが作れるはずだ。 *Pokemon powerful enough to survive the cloning process. Perhaps then I can unlock the secret to restoring life itself.*

(疋田 (2017: 18))

このシーンでは、ふたりの研究者が遺跡調査中、会話をしながら「幻のポケモン」について語っている。しかし、その英語字幕は、まず、日付で始まり、自称詞 I が語りの視点となり、場面に映っている語り手の同僚 (my colleagues) の様子を俯瞰的に語っているように表現されている。つまり、日本語はふたりが会話の「場」に臨場して、その「場」から語るスタイルであるが、英語字幕は客観的な視点からの 1 人称語りとなっている。これは池上 (2011) が日本語は「主観的把握」、英語は「客観的把握」を好む言語だとする考えや西田哲学の「場」の概念から日本語の特徴を説明する試み (cf. 藤井 (2020) 等) の研究の発展に大きな貢献が期待される発見である。疋田の観察した例は、日本語が「場」に根ざした表現を志向していることを、英語字幕はその逆で、「神的視点」で出来事を描いていることを示す、重要なものである。

最後に、電車やバスなどに見られる注意喚起標識の日本語標記とそれに付加的に添えられた英語標記の表現を比較した榊原 (2020) が観察した例を挙げる。

(1) a. 転倒防止のため、完全に止まってから席をお立ち下さい。

For your safety, please stay seated until the bus comes to a complete stop.

b. 乗降口または非常口から、安全を確認のうえ車外に避難して下さい。

Check that the conditions are safe before evacuating outside the bus from an exit or emergency exit.

c. ランプ点灯中は、ボタンによりドアを開閉することができます。

Door can be opened/closed by pressing buttons while the lamp is lit.

d. 避難時には、お荷物は持ち出さないで下さい。

Leave your baggage on the bus when evacuating.

「西欧の言語が名詞中心構文であるのに、日本語は動詞中心の性格がつよい。」(外山 (1973) : 10) との指摘から、英語は名詞、日本語は動詞を中心とする表現をそれぞれ好む傾向があるといわれてきた。(1a) が示すように、日本語の「完全に止まってから」という動詞を含む表現は、英語では a complete stop と名詞句で訳されており、この傾向を示している。しかし、(1b-d) では、日本語では「安全」「ランプ点中」「避難時」と名詞表現が用いられ、その英語訳は動詞を中心とした表現が使われている。榎原が観察したこれらの例はこれまで正しいとされてきた学説と異なり、日本語が動詞、英語が名詞を志向することが必ずしもいえないことを示している。同様のことを新屋 (2014) も広い言語事実から明らかにしているが、榎原 (2020) の発見も日本語の名詞志向性を考える上で重要なものである。

本稿では、これまで提出された 3 編の卒業研究で行われた興味深い言語事実を紹介し、それぞれの研究が現在の言語研究（主に、日英語の対照言語研究）の発展にどのように寄与するのか解説した。本稿で取り上げた 3 編の研究はどれも身近にある言語資材を分析したものだが、日英語がそれぞれ持つ特質に関わる言語研究に大きく寄与する言語事実を提供するもので、大変意義のある研究である。紙幅の都合で本稿で取り上げた研究はわずかであったが、次回もこれまでの卒業研究から重要な発見を紹介したい。また、このような先輩の優れた研究に追従する素晴らしい研究が今後も多数なされることを期待する。

参考文献

<取り上げた卒業研究>

遠藤玖瑠美 (2018) 『『君の名は』から読み取る日本語と英語字幕の比較研究』特別研究 常葉大学外国語学部英米語学科

疋田初季 (2017) 「日本のアニメーション映画における日英表現の違い：『劇場版ポケットモンスター ミュウツーの逆襲』の分析」特別研究 常葉大学外国語学部英米語学科

榎原未菜 (2020) 「翻訳における日英差—注意表記にみられる特徴—」特別研究

常葉大学外国語学部英米語学科

<卒業研究以外の参照文献>

藤井洋子 (2020) 「日本語の「場」志向性と述語主義を考える－英語との比較から－」井出祥子、藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』 62-103. ひつじ書房

池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』 49-67. ひつじ書房

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』 岩波書店

新屋映子 (2014) 『日本語の名詞志向性の研究』 ひつじ書房

定延利之編 (2018) 『「キャラ」概念の広まりと深まりに向けて』 三省堂書店

外山滋比古 (1973) 『日本語の論理』 中央公論社

2022年夏台湾でのフィールドワーク： 日本漢学が鄭成功と木下彪をつなぎそう

若松 大祐

2022（令和4）年8月11日（木）から10月2日（日）まで、筆者は台湾に滞在した。主に木下彪の足跡をたどりながら、時に鄭成功に関する史跡を訪ねた。そして、筆者にとっては、期せずして日本漢学が木下彪と鄭成功をつなぎ始めている。本稿では、筆者が2年半ぶりに訪ねた台湾で、わずか2ヶ月弱に取り組んだことを記す。また、他にも台湾で取り組んだことを書いておく。

(1) 木下彪

- ・木下彪に関する研究機関を訪ね、資料を収集する。
- ・2022年8月11日（木）～2022年10月2日（日）

木下彪（KINOSHITA, Kotori (Hyo), 1902-1999）は漢詩人である。宮内省に勤務し、1936-46年に大正天皇御製集を手掌する。第二次大戦後は、宮内省御用掛、外務省研修所講師、岡山大学教授、（台湾）中国文化学院教授を歴任する。台湾を三回訪れている。一回目は、1960年12月23日から1961年1月20日にかけて、中華民国開国50年を記念して招聘される。蒋介石を始めに、政界や学界の要人たちと面会する。二回目は、1966年5月16日から11月23日までの半年間、台北に滞在して政治大学で講義を行いながら、『孫中山先生與蔣總統』を執筆する。9月、蒋介石に再び面会する。三回目は、1967年から1974年までの8年間、中国文化学院（現在の中国文化大学）に設置された中華學院日本研究所の教授となる。明治期の詩文や外交文書を用いて演習を行う¹。

こうした木下彪の台湾滞在を踏まえ、まず筆者は「外籍学人來台研究漢学奨助」（外国人が來台して漢学を研究するための奨励）を受けて国家図書館漢学研究中心（訪問先1-1）に滞在した。特に国家図書館では、木下彪の寄稿した雑誌記事

¹「若松大祐と美麗島 > 木下彪と現代台湾史 > 木下彪の略歴」（<https://sites.google.com/view/dwakamatsu/research/kotori>）[2023年1月20日確認]。

を閲覧し、複写（スキャン）した。

続いて、中国文化大学の図書館閲覧組（訪問先 1-2）で中国文化大学数位校史資料庫（デジタル校史データベース）を使い、創立者張其昀の資料の中から木下彪に関係する資料を閲覧した。このデータベースは学外からもアクセスが可能であるものの、学内のみで閲覧できるデータがある。前学長の徐興慶氏、図書館長の陳立文氏、閲覧組の専門職員諸氏の協力を得て、中国文化大学での資料収集を大いに展開できた。

最後に、国立政治大学の図書館校史與檔案組（訪問先 1-3）で、木下彪の関係資料の有無を尋ねた。筆者が帰国間際に尋ねたため、専門職員の榮予恩氏から帰国後に連絡を受け、『政大校刊』に数本の記事のあることを知った。

台湾での資料収集に際しては、まずインターネットでデータベースなどを使い、関連記事の存在を把握しておく。その上で、実際に国家図書館や中国文化大学図書館で、実際の記事を閲覧し、複写（スキャン）した。特定した実際の記事の前後にも、関係する記事が掲載されていることが多い。それゆえにインターネットに頼り切ることなく、図書館へ足を運ぶ必要性を改めて実感した。

< 訪問先 1-1 >

国家図書館 (National Central Library)

〒 100201 台北市中正区中山南路 20 号

<https://www.ncl.edu.tw/>

漢学研究中心 (Center for Chinese Studies)

<https://ccs.ncl.edu.tw/>

< 訪問先 1-2 >

中国文化大学 (Chinese Culture University)

〒 11114 台北市陽明山華岡路 55 号

<https://www.pccu.edu.tw/>

中国文化大学図書館閲覧組 (Readers Services Section, Chinese Culture University Library)

<https://lib.pccu.edu.tw/>

中国文化大学数位校史資料庫（デジタル校史データベース）

<https://csh.pccu.edu.tw/Archive/>

II. 1. 教員エッセイ

< 訪問先 1-3 >

国立政治大学 (National Chengchi University)

〒 116011 台北市文山区指南路二段 64 号

<https://www.nccu.edu.tw/>

国立政治大学図書館校史與檔案組 (University History and Archives Section,
National Chengchi University Libraries)

<https://archive.rdw.lib.nccu.edu.tw/>

(2) 鄭成功

- ・鄭成功に関する史跡を参観し、関係者と意見交換を行う。
- ・2022年9月3日(土)～5日(月)、2泊3日

鄭成功(1624-1662年)は、長崎平戸で生まれる。中国で王朝交代が起こった際、鄭成功はアモイや台湾を拠点にして明朝の復興を支え、新興の清朝に対峙した。台湾の台南には関係史跡も多く、鄭氏家廟もある。

筆者は、まず9月3日(土)、鄭氏家廟(訪問先2-1)に鄭道聰氏(台南市文化協会・理事長)と高国英氏(台南市文化協会・栄誉理事長)を訪ねた。翌4日(日)には、鄭道聰氏と高国英氏の案内で、台南市内の鄭成功関係史跡を参観した。参観した場所は、多くが岡山芳治「台南市における鄭成功関係史跡」『平戸史談』17号(平戸:平戸史談会、2010年)、pp.44-56に記載の場所である。鄭成功の上陸地である鹿耳門や、オランダ軍との古戦場である四草などのように関係史跡は台南市郊外にあり、交通の便が良い場所にあるとは言い難い。鄭道聰氏と高国英氏のおかげで、効率よく参観できた。

なお、このフィールドワークで得た知見については、2022年11月12日(土)に立命館大学社会システム研究所主催の2022年度公開学術シンポジウム「香港・台湾の来し方と〈私〉たちの行く末」で、「鄭成功の描かれ方:1852年平戸、1930年台北、そして21世紀」と題して発表した。その際の発表原稿をさらに加筆修正して、学術雑誌に投稿する予定である。

長崎平戸の千里ヶ浜には、「鄭延平王慶誕芳蹤」(鄭延平王慶誕芳跡)がある。これは、鄭成功を顕彰した漢文約1500字が刻まれた石碑である。当初は朝川善庵『鄭將軍成功伝』(約5000字)を刻むはずであった。しかし、5000字を刻め

る大きな石がなく、加えて朝川善庵が急逝したため、葉山鎧軒が 1500 字に縮めて「鄭延平王慶誕芳蹤」が出来上がった。朝川善庵『鄭將軍成功伝』も、葉山鎧軒「鄭延平王慶誕芳蹤」も、いずれも日本漢文（日本人の書いた中国語）である。筆者にとっては、期せずして日本漢学が木下彪と鄭成功をつなぎ始めている。

< 訪問先 2-1 >

鄭成功祖廟（鄭氏家廟）

社団法人台南市文化協会

〒700 台南市中西区忠義路二段 36 号

<https://www.twtainan.net/zh-tw/attractions/detail/711>

(3) 中華救助總會

- 中華救助總會を訪問し、関係者と意見交換を行う。
- 2022 年 9 月 8 日（木）15:00-18:00

中華救助總會は、社会福祉や人道支援を目的とする非営利団体（NPO）である。1950 年に台北で創設された。筆者の研究との関わりでいえば、中華救助總會は 1954 年から現在まで北タイの華人の支援を行っている。

< 訪問先 3-1 >

中華救助總會

〒100215 台北市羅斯福路一段 7 号 2F

<http://www.cares.org.tw/index.do>

(4) ふじのくに静岡県台湾事務所

- ふじのくに静岡県台湾事務所を訪問し、関係者と意見交換を行う。
- 2022 年 9 月 13 日（火）15:00-16:30

静岡県は上海、ソウル、台北、シンガポールにそれぞれ海外事業所を設置している。公益社団法人静岡県国際経済振興会のサイトによると、ふじのくに静岡県台湾事務所は次の事項に取り組んでいるという。

- 台湾における静岡県への観光誘客、観光 PR の実施
- 台湾投資環境の情報提供
- 静岡－台北定期便利用促進

II. 1. 教員エッセイ

- ・市民スポーツ、文化活動等の民間交流支援
- ・青少年交流支援、静岡への教育旅行誘致
- ・静岡県内市町と台湾の自治体等との交流促進支援
- ・県産品販路拡大、県内企業の台湾における活動支援等
- ・その他 静岡および台湾の関係機関への紹介

静岡県と台湾は、防災（地震対策）や過疎化（地域創成）において直面している課題が類似している。そのために互いに学び合えるという宮崎悌三所長の考えが、筆者には印象に残った。

< 訪問先 4-1 >

日本公益社団法人静岡県国際経済振興会台北弁事処（通称：ふじのくに静岡県台湾事務所）

〒10485 台北市中山区南京東路二段137号13F（聯邦商業大樓）

<https://www.shizuoka.org.tw/>

http://www.siba.or.jp/oversea_sites/post_3.html

2. 外国語学部コロキウム

2022 年度外国語学部コロキウム

外国語学部言語文化研究会は、今年度もコロキウム (Colloquium) を主催した。その目的は、外国語学部教員が自身の教育研究活動の一端を発表して、外国語学部教員同士で関心を共有し、今後の外国語学部の教学へ活用しようとするところにある。参加者については主に外国語学部教員を想定しつつ、大学ホームページなどを使って学内外からの参加を広く呼びかけている。2022 年度は 3 回開催できた。新任教員と退任教員による研究発表である。ただし、外国語学部専任教員の他に参加者がほとんどなかった。来年度は、例年のように前後期にそれぞれ 1 回ずつ開催し、より多くの参加者の来聴を願いたい。(若松大祐)

第 1 回

日 時：2022 年 6 月 29 日 (水) 15:10 ~ 16:20

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A309 教室

講 師：戸田 勉 (英米語学科・特任教授)

演 題：ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』とナショナリズム

— 『ユリシーズ』が出版され、アイルランドが自由国となった 1922 年をめぐって—

要 旨： アイルランド人作家ジェイムズ・ジョイス (James A. A. Joyce, 1882-1941) の代表作『ユリシーズ』(*Ulysses*) が 1922 年に出版され、今年 (2022 年) がその 100 周年記念にあたる。また、1922 年はアイルランドが約 700 年にも及ぶイギリスの支配から解放され、自由国の地位を獲得したと歴史的な年でもあった。このコロキウムでは、『ユリシーズ』を、ジョイスとナショナリズムという観点から捉え直し、同時に、100 年前のアイルランドのナショナリズムと 21 世紀を迎えたアイルランド人のナショナリズムに関する意識の変化について解説した。構成と要約は以下の通りである。

1. 『ユリシーズ』出版 100 周年記念事業「22Ulysses」

II. 2. 外国語学部コロキウム

『ユリシーズ』出版 100 周年を祝う記念事業が世界中で行われているが、日本では日本ジェイムズ・ジョイス協会の若手が中心となって、「22Ulysses」をいうオンライン講座を開き、1 年を通じて小説をわかりやすく読む試みがなされている。

2. アイルランドの歴史概略とジョイス年譜

ジョイスが生まれた 19 世紀末から 20 世紀初頭のアイルランドは民族運動が活発化した時代だった。しかし、ジョイスはその運動に背を向けて祖国を去り、大陸に渡った。

3. 『ユリシーズ』のテーマ

この小説の中心人物レオポルド・ブルームは、新聞の広告取りを生業とするごく平凡な中年の男である。父親がユダヤ人であるために、ユダヤ人として誤解され、馬鹿にされ、いじめを受ける。妻にも浮気をされてしまう。しかし、彼が 1 日を通して、非暴力と優しさを実践し続けると、最後には、ホメロスの英雄オデッセウスの輝きを獲得する。これが小説の題名の意味である。

4. ジョイスとアイリッシュ・ナショナリズム

レオポルド・ブルームに、ユダヤ人でもアイルランド人でもない曖昧なアイデンティティを付与することにより、ジョイスは当時のアイルランドの純血主義的なナショナリズムの偏狭性を批判している。ジョイスが民族運動の只中に祖国を捨てた理由もここにある。

5. 独立後のナショナリズムと脱神話化

1948 年にアイルランド共和国として正式に独立してから、1980 年代まではアイルランドの建国史はナショナリスト史観が中心だった。しかし、この歴史観に見直しが始まった。血の犠牲によって祖国が成り立ったという歴史観は、北アイルランド紛争における戦闘を正当化することにもなる。また、文学の分野でも、W.B. イェイツやジョイスなどに代表されるアイルランド文学の流れからの脱却が謳われている。

6. 21 世紀のアイルランド

1990 年代に始まった「ケルトの虎」と呼ばれる未曾有の好景気によって、アイルランドは「ヨーロッパの貧乏国」から「ヨーロッパの輝ける

星」に変貌した。しかし、現在、自分達のアイデンティティをめぐってアイルランド人の間で混乱が起きている。「ポスト・カトリックの多元主義国家」を目指せるかどうか、今アイルランドは岐路に立たされている。

第 2 回

日 時：2022 年 11 月 30 日（水）15:10～16:20

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A306 教室

講 師：柳 采延（グローバルコミュニケーション学科・講師）

演 題：韓国における教育する母 — 家父長制と構造化される選択

要 旨： 講師の著書『専業主婦という選択』の概要を報告した。著書の目次および概要は、次の通り。

柳采延『専業主婦という選択：韓国の高学歴既婚女性と階層』勁草書房、2021 年。

< 目次 >

序 章 「高学歴専業主婦」という現象

第 I 部 韓国における社会構造の変化 — 家族と女性

第 1 章 韓国の社会変動と女性の労働

第 2 章 韓国の女性・家族政策の変遷

第 II 部 韓国における主婦の変容と「専業主婦」

第 3 章 家庭内における女性の地位と役割 — 一九六〇～二〇一八年の新聞記事分析から

第 4 章 働く主婦へのまなざし — 主婦の労働をめぐるとその歴史的経路

第 5 章 教育する母

第 III 部 専業主婦という選択と家父長制

第 6 章 「専業主婦」という選択と社会構造

終 章 構造化される選択

< 概要 >

本研究においては、産業化が進み、欧米に近い家族形態が一般化して

II. 2. 外国語学部コロキウム

きたとされる韓国社会のなかで、とりわけ1990年代以降の社会経済的な変化の下で、ジェンダー規範と当事者の意識・行動が相互作用しながら、高学歴専業主婦という選択が成立した過程を分析する。

具体的には①女性のライフスタイルの通時的変化と共時的多様性の進展、②当事者視点による（語りにみる）女性たちの地位や役割の意味づけ、③「家父長制」と階層性の関わりに着目し、「専業主婦という選択がいかにかに構造化されているか」「家父長制が男女格差とともに階層間格差をいかにかに生み出しているか」を描く。

第1章「韓国の社会変動と女性の労働」では、1960年代韓国の近代化以降の各時代における主要な社会変動とともに、社会構造変化に伴う女子労働と韓国家族の変容を描く。第2章「韓国の女性・家族政策の変遷」では女性政策や家族政策の変遷を分析し、社会変動に伴う女性の生産労働／再生産労働がどのように規定されてきたのかを考察する。第1章と第2章を通して、韓国は民主化、高学歴化の進行、経済発展などの変化を成し遂げながらも、一方で、家父長制的な体制を維持するような保守的な傾向が、社会政策の面では特に2000年代以降の高齢社会に伴って顕著に見られたという点が明らかになった。

第3章「家庭内における女性の地位と役割 — 一九六〇～二〇一八年の新聞記事分析から」では、当事者の意識において重要な焦点となっている家庭内のジェンダー間の役割の非対称性に注目し、家庭内の性別役割規範と女性の対応の変遷を新聞記事（『京郷新聞（경향신문）』、1960～2018年）から分析する。

第4章「働く主婦へのまなざし — 主婦の労働をめぐる言説とその歴史的経路」では女性の生産労働と再生産労働の意味づけの変化に注目する。女性雑誌の内容分析から従来「良妻賢母規範や再生産労働規範の強化」と呼ばれてきた現象が、子どもの教育を中心とした専業主婦のライフスタイルの形成を通じ、働く主婦との差別化を図る「専業主婦イデオロギー」であることを指摘する。

第5章の「教育する母」では、子どもの教育への関与に見られる母親の行動と意識の特徴を明らかにする。子どもの教育への関与には、①母

親の高学歴という資源の活用、②業績主義的評価が可能なタスク（教育の仕事化）、③「良妻」の逸脱と高い自律性という特徴が見られる。子どもの教育という役割に管理職・専門職に類似する仕事としての性質を持たせることで自己肯定感を得ており、子どもの教育にコミットすることは、高学歴中間層としての自己主張となっていると分析する。

第6章『「専業主婦」という選択と社会構造』では、以上のようなマクロな社会変化と女性間の水平的分化・垂直的分化の進展の下での専業主婦という選択の位置づけを考察した。子どもの教育を「仕事」として位置付け、二重負担型とも、既存の家事労働中心の専業主婦とも異なった新しい専業主婦の形をとる教育する母は、擬似的に「対称的な分担型」を装うことに特徴があり、一部の高学歴既婚女性の間での望ましい選択となっている。

終章「構造化される選択 — ミクロとマクロの視点から」では、学歴と職のミスマッチ、経済的不平等の拡大などの社会変動の中で当事者の意識（個人レベル）においては家庭内ジェンダー不平等を悪化させない選択であり、（威信の高い）ホワイトカラー的仕事の代替として位置づけられている女性の選択が、結果的に「家父長制への同調と維持」（家父長制の新たな再生産）と階層の分断や階層間格差というマクロレベルでは望ましくない状態を作り出すことについて述べる。

以上のような女性の選択を生み出す威信や資源の配分のルールには、「家父長制」がかかわれており、また家父長制は人々の選択肢の構造化と配分を通じて機能している。（「選択肢の構造化」とは、「仕事・結婚・出産・子育ての選択肢が密接に結び付けられて自由度が低い状態」「配分」とは、「それらの選択肢が個々人の属性と結びつき開放性が低いこと」と定義する。）そのような家父長制にうまく適応・同調する人々と適応・同調できない人々との間の格差は、近年では出産や養育・教育などの労働力再生産のありようの違いとしてあらわれており、その格差はさらに広がりがつつある。

II. 2. 外国語学部コロキウム

第3回

日時：2023年2月8日（水）13:15～14:25

会場：草薙キャンパス A 棟 3階 A306 教室

講師：清 ルミ（グローバルコミュニケーション学科・教授）

演題：医療における異文化コミュニケーション的ホリスティックケア—紹介と臨床事例

要旨：本報告は、発表者が所属する日本アールヴェーダ学会において2021年度と2022年度の2回にわたり口頭発表した内容と、2021年6月に依頼されオンライン講演した寺子屋シャーラでの講演内容の概要報告である。

まず発表者が資格を有する複数の代替医療の方法や長い歴史を有する民間療法、国際的に特許を取得している健康用具、インドの伝統医学アールヴェーダの歴史と治療法などについて紹介され、参加者は発表の理解に必要な基礎知識を得た。その上で、発表者自身が家族と発表者自身に対して試み、臨床効果が得られた複合的トリートメントの事例が紹介された。いずれも顕著な臨床成果が認められる事例であるが、そこに至る経緯では、米国、日本、インド、中国等、文化的背景の異なる治療方法が機能していることが明らかになった。

3. 外国語学部文化講演会

外国語学部文化講演会

清 ルミ

常葉大学外国語学部言語文化研究会では、毎年、文化講演会を開催している。目的は、21世紀を迎えグローバル化が常態化する今日、参加者が外国文化や多文化共生について理解を深めるところにある。コロナウイルス感染症の蔓延のために、2020年度と2021年度に開催できなかった。今回は3年ぶりの開催になる。

2022年度は、静岡生まれの吟遊詩人である茶喜利氏を招いた。今回、グローバルコミュニケーション学科1年生の「人間力セミナー」の授業時間に開催したが、英米語学科の学生や教員も加わり、合計約120名が参加した。

日 時：2022年9月21日（水）10時45分 -12時15分

会 場：静岡草薙キャンパス B201 教室

講 師：茶喜利（ちゃっきり）ほか共演者1名

吟遊詩人。静岡県生まれ。梁塵秘抄歌の桃山晴衣氏やインドの古典音楽家キョール・ゴージュ氏に師事。師より授かったインド三味線や創作楽器に即興の詩を乗せて演奏する活動を主に展開している。20代に訪れた中国で自身に流れる母なる旋律「マザーノート」に出会い、これまで40か国以上の劇場や世界遺産にて演奏を行う。また、音楽療法や個人セッション、体幹を整えるために考案した3拍子ウォーキングと



合わせて表現者に必要な感性を追求している。現在、駿河国分寺の護摩太鼓を25年、女優の浅野温子氏の古事記よみ語りの音楽を10年にわたって担当し、全国の神社や仏閣で依頼を受けて演奏も行っている。ダンサーでもあり、ダンス

II. 3. 外国語学部文化講演会

の振り付けもするというマルチなアーティストである。

題 目：吟遊音楽へのいざない

要 旨：民族楽器の演奏+講演。

講師の茶喜利氏は、まず、富士山麓での自作ダンスの映像を見せ、もともとダンサーであるプロフィールを披露し、高校時代の語学留学先で見た路上パフォーマンスに触発されダンサーになった経緯を語った。その後、共演者1名とともにインド三味線の調べに乗せて即興で吟遊詩を披露し、海外における吟遊詩人の歴史を紐解いた。その後、アフリカの打楽器等、複数の楽器の演奏と歌の合間に、演奏活動で世界各国を旅した折の強烈な異文化体験を語った。

参加した学生からは感動の声が多く聞かれた。「初めて聞く吟遊音楽に引き込まれた」「コミュニケーションが分かち合うことだと実感した」「考えると止まる、感じると進むという講演者の言葉が胸に響いた」など、新たな文化に触れ、刺激を得た様子を感じられた。



4. 特別研究の題目

英米語学科 卒業研究 題目一覧

石川芳恵研究室

- 柏谷 怜杏 中学校英語新旧教科書における言語活動の分析
高橋 慎太郎 英語の授業における教師の使用言語に関する研究－効果的なコードスイッチングを目指して－
田中 沙羅 小学校英語教育におけるフォニックスの有効性と導入の提案
森 双葉 英語スピーキングにおける難しさの克服－Speaking anxietyに焦点を当てて－

小池理恵研究室

- 櫻井 麻里奈 JAPAN TEA が歩んだ道－清水港からアメリカへ－
寺岡 実優 プリンセスと歴史が表す女性像－ディズニー映画『ポカホンタス』を中心に－

柴田里実研究室

- 八木 友香里 A Case Study of a hafu's Second Language Development in Japan
坂田 越 継続的な多読学習における原著の学習的効果～GRと比較して～
大塚 詞穂 SDGsをジブンゴト化するための英語絵本の活用：17のゴールと英語絵本
森 涼生 モバイル学習は日本人 EFL 学習者の学習の習慣化に影響を与えるのか
渡井 万智 Study with me 動画視聴を通じた他者との時間の共有は学習者にどのような影響を及ぼすのか
芝原 美羽 中学校・高等学校における成功する英語多読指導の一提案
鈴木 風香 日本人大学生の L2 学習と L3 学習の相互関係

II. 4. 特別研究の題目

PIROTE MEICHSEL REYES

フィリピンにルーツを持つ児童・生徒にとっての複数言語習得
—オートエスノグラフィーによる事例研究—

戸田勉研究室

- 小長谷 怜史 イギリスの文化と車の発展
- 神谷 美紗都 アイルランド音楽とスコットランド音楽に感じる「懐かしさ」
はどこから来るか
- 野末 悠華 マリー・クアントがもたらした新たなファッションとコスメの
世界
- 鈴木 麻里子 シャーロック・ホームズ作品にみられるヴィクトリア朝の人種
問題と女性の地位
- 宮崎 歩夢 クマのプーさんが癒せなかった一人の少年
- 杉山 優那 映画『クルエラ』のファッションから見る 1970 年代のイギリス
- 千葉 大輝 Jane Austen 著 *Pride and Prejudice* から読み取るジェントル
マンの本質
- 小林 和佳奈 二つの大戦期におけるドイツとイギリス

山田昌史研究室

- 稲葉 諒 人を惹きつける、面白い漫才とは？— M-1 グランプリの優勝
ネタを分析して—
- 内野 晴加 漫画の登場人物が使用する言葉とキャラ付けの関連性について
- 幸塚 真白 ジブリ作品の翻訳の違いから読み解く日本文化
- 寺本 想 漫画『ワンピース』におけるオノマトペ表現の日英対照研究

良知恵美子研究室

- 荒井 美奈 英語学習におけるアプリケーションの効果的な活用方法につい
て—特にスピーキング教材にフォーカスをして—

- 松山 幹汰 The Correlation between Exercise and Health and its Effect on Motivation
- 曾根 莉子 多読継続はなぜ難しいのかーモチベーションの維持に焦点を当ててー
- 藤森 久留海 日本人英語学習者の等位接続詞産出傾向と誤用
- 鈴木 菜々花 映画を活用した英語学習の動機付けと時間外学習への影響

II. 4. 特別研究の題目

2022 年度グローバルコミュニケーション学科特別研究

共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧

中国特別研究

担当 戸田 裕司

《共同翻訳文献》

原題：黄仁宇《我相信中国的前途（増訂本）》（中華書局，2020年）

《サブ・レポート題目一覧》

- 19122029 河原崎春佳 「日本と中国の価値感－なぜ日本人は中国人が嫌いなのか－」
- 19122033 栗田陽斗 「中国語の表現から見た中国人の考え方－流行語と注意文から考える意思伝達や行動の考え方－」
- 19122039 斎藤千愛 「中国の就職難から見る社会問題」
- 19122043 嶋崎明日香 「中国 EC 市場と日本企業」
- 19122054 高仲純怜 「中国人はなぜパクするのか－中国の知的財産権と経済成長－」
- 19122055 高橋南海 「言語の壁による情報格差問題について－台湾と静岡を編集して－」
- 19122063 永島綾乃 「中国のコード決済から見る新経済の成長」
- 19122072 濱田美優 「占いから見る陰陽五行思想」

日本語教育特別研究

担当 谷 誠司

- 19122025 片桐奈津希 「マンガ『ワンピース』における笑い声表記からみる役割語」
- 19122067 成岡奈菜花 「リメイク版ドラマから見る日韓の依頼表現の比較」

韓国特別研究

担当 崔 慶原

《共同翻訳文献》

原題：박태웅 『눈 떠보니 선진국』 한빛비즈, 2021

《サブ・レポート題目一覧》

- 19122014 内山花苗 「韓国の教育格差－制度が生んだ副作用－」
- 19122034 小池茉衣 「社会を映し出す KPOP －ガールズグループのコンセプトの変化－」
- 19122074 春田梨緒 「日韓の環境保全型化粧品に対する意識－マーケティング戦略を中心に－」
- 19122077 藤田大輝 「声を挙げる女性と受け止める社会－『伊藤事件』にみる男性ジェンダー意識－」
- 19122090 望月咲良 「社会の多様性に向けた自治体の取り組み－『渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例』を中心に－」
- 19122095 山下諒真 「教育的価値を生み出す e スポーツ－新異中プロジェクトにみる e スポーツの社会的意識－」
- 19122101 渡邊瞳 「日韓でみる男女役割意識－教育環境意識を中心に－」

ブラジル / ポルトガル特別研究

担当 江口 佳子

《共同翻訳文献》

原 題：Ana Maria Machado, *Do outro lado tem segredos*, São Paulo, Companhia das Letrinhas, 2019

《サブ・レポート題目一覧》

- 19122001 赤堀虹花 「現代ブラジルの政治－右派ボルソナーロの政策－」
- 19122002 秋山莉子 「格差から見るブラジル社会と日本社会」
- 19122021 岡本星 「パウロ・コエーリョ『11 分間』から考える女性の見られ方」
- 19122038 斎藤すみれ 「歌詞から考える、ブラジル音楽の言葉の表現と音楽性－

II. 4. 特別研究の題目

ブラジルポルトガル語と日本語を比較してー」

- 19122064 中西レイ 「コルデルから見るブラジル」
19122066 中村祐綺 「日系ブラジル人と日本の学校について」
19122073 原崎七菜 「ブラジルの食文化の歴史」
19122082 松井二千果 「ショーロはどうしてこんなにも愛されているのか」
19122084 松丸奈央 「建築家オスカー・ニーマイヤーの人生と彼が伝えたかったこと」

スペイン・ラテンアメリカ特別研究

担当 増井 実子

《共同翻訳文献》

スペイン日刊紙エル・pais (El País) インターネット版で報道される日本の諸相を読む

《サブ・レポート題目一覧》

- 19122009 石田悠 「スペインフットボールにおけるウルトラス問題ー「宥和的観衆体制」へ向けてー」
19122013 鵜飼直哉 「スペイン・ディズニーリゾートを考えるーディズニーリゾートの集客技術から見るスペインの可能性ー」
19122018 大石健太郎 「スペインバスケットボールの強さの秘訣ー下部組織の充実と日本バスケへの影響ー」
19122037 齋田果歩 「スペイン黄金世紀演劇ー大衆への広まりー」
19122053 鈴木悠人 「ワインの歴史ースペインとワインの関係性ー」
19122056 田中一成 「日西の苗字事情ー苗字から見る日西の風土・文化ー」
19122058 田村梨華 「奴隷制の実態ー太平洋奴隷船の環境と制度廃止に至るまでー」
19122060 坪井美祐 「サンティアゴ巡礼の魅力ー年代別で比較してー」
19122070 野澤歩未 「スペインにおける差別問題ーヒターノの事例をもとにー」
19122099 脇田七帆 「スペイン黄金時代の大衆生活様式ー宗教を重んじた生活体系ー」

19122100 渡邊友香 「スペインのファッションブランド「ZARA」の経営戦略」

★2023年1月31日(火)に「グローバルコミュニケーション学科特別研究サブレポート報告会」が以下のポスターのように実施され、盛会のうちに終了しました。

GC学科 特別研究 サブレポート 報告会 2022

日時

2023年1月31日【火】

13:00-16:40

場所

A201 スペイン研究 増井ゼミ

B201 ブラジル・ポルトガル研究 江口ゼミ

C201 韓国研究 崔ゼミ

C206 中国研究 戸田ゼミ
日本語教育研究 谷ゼミ

4年生の特研履修者が執筆したサブレポートの概要を報告します。全学年が聴講できます。

事前予約制



申込〆切 **1/27**

報告者氏名と
タイトル

プログラムをご覧ください。

主催

外国語学部
グローバルコミュニケーション学科

5. 日本語教員養成課程の活動報告

正しく伝えるための日本語

20121097 水野 元葉

みなさんは、普段何気なく使っている日本語が持つ意味について考えたことはありますか。私は日本語教員養成課程を履修し、日本語を教える立場に立って改めて、相手に正しく伝えるための日本語について意識するようになりました。一年次に、養成課程に入って初めに受ける授業が日本語教育入門です。この授業で特に印象的だった項目は、助詞の「は」と「が」の違いです。「これは本です」「これが本です」と二つ表現があった場合、前者は聞き手にとって既知の情報、後者は未知の情報をそれぞれ表します。たった一文字の違いなのに、含有する情報がこれほどまでに異なるのか、と強い衝撃を受けたことを覚えています。この他にも、音声学やコースデザイン、文法など様々な側面から日本語について学習を重ねてきました。三年生になった今、改めて今年一年間を振り返ってみると、大学二年間で得た日本語教育の学びを実践に移す挑戦の年でした。

前期に履修した日本語教授法という授業では、コミュニケーションアプローチやサイレントウェイなど、日本語教育における様々な教授法を取り入れた教案を作り、グループのクラスメイトと協力して模擬授業を行いました。初めて行った授業では、原稿に忠実に話すことに熱中するあまり時間配分をおろそかにしてしまい、想定時間より短くなってしまいました。しかし、授業回数を重ねていくなかで、教授法の種類と使用するのに適した場面を学びながら、教案と授業を組み立てる方法がだんだんと分かるようになりました。また、所属グループの発表だけでなく、他グループの模擬授業を観察することによって、それぞれの教授法の良い点、悪い点を自然と学ぶことができました。

後期に受講した日本語教育実習では、実際に日本語学校に通う学習者に対してZoomを通したオンライン授業を行いました。担当するクラスはA1からA2で、これはJF日本語教育スタンダードの枠組みにおける、入門から初級に当たるクラスです。実際の教壇実習をする前には、クラスメイトを学習者役に見立てた模擬授業を行いました。作り上げた教案を実演する中で見えてきた欠点を修正しつ

つ、実習で用いる 30 分の授業を組み立てました。その際に私が重視した「三つのバランス」を紹介します。

一つ目は、「教師と生徒の発話量のバランス」です。前述した教授法の授業内で、清ルミ先生は「教師だけが一方的に話している授業はいい授業ではない」とおっしゃっていました。生徒の反応を考慮せずただ一方的に解説するだけでは、参考書を読むのと変わりません。実際、模擬授業の際には説明が多くなってしまったことが反省点でした。このことを踏まえ、学習者の回答や意見を聞く時間を多めに取ることで双方向的な授業を目指しました。

二つ目は、学習と実践のバランスです。言語を学び、運用していく過程でアウトプットの活動は不可欠なものです。授業内には機械的な練習だけでなく、学習者同士で話し合い作文をする、コミュニケーションな活動も取り入れました。

三つ目は、授業時間と授業密度のバランスです。模擬授業では機械的練習の種類が少ししか用意できず、授業が単調になってしまう問題を抱えていました。これを改善するために、同じ練習でも扱う題材や練習の種類にバリエーションを持たせ、繰り返しを避けるように工夫をしました。

改善した教案をもとに挑んだ実習当日、Zoom を通して初めて学習者と話した時、画面越しではあるものの、学習者の皆さんの元気な姿を見ることができました。そのおかげもあって、終始落ち着いて授業を行うことができました。当日は想定よりも時間に余裕があったため、グループワークの時間を多めにとり、予め用意してあった予備のワークも行って調整を行いました。

教壇実習が一通り終わり、日本語学校の野田先生にバトンタッチを行った際に、次の日曜日の予定を、「Vに行きます」の学習文型を使って学習者に聞くようにアドバイスを受けました。私が「日曜日に何をしに行きますか」と聞いた途端、学習者の皆さんは口々に「日本語能力試験を受けに行きます」と学習文型をきちんと使って嬉しそうに答えてくださいました。学習文型を日常の出来事と関連付けて提示することの大切さを改めて痛感したとともに、日本語能力試験にこれから挑む学習者さんに少しでも手助けが出来たと感じた時、この上ない喜びを感じました。

リモートでの授業は、対面授業とは同じようにはいきません。表情や教室の空気が読みづらかったり、回線の影響で声が途切れたりすることもあります。この

Ⅱ. 5. 日本語教員養成課程の活動報告

ような障壁があっても、それを乗り越えるためにいかに伝わりやすい言葉選びをしていくのが良いのか、日本語を学び教える立場として、これからも時間をかけて吟味していきたいです。



【日本語教育実習の実施風景】

想像力と思いやりが不可欠

20122043 谷崎 遥

私が日本語教員養成課程を取ろうと思ったのは、日本語を人に教えられるようになりたいという想いからではない。大学に入ったのだから何か残るもの、身につけたものが欲しいという下心からだった。しかし、学習を進めていく中で、日本語教員として必要となる知識や技術のみならず、学習者のバックグラウンドへの配慮や、現状を知ろうとする心掛けも大切な学びだと知った。

約2年間、椅子に座って教科書を開き、先生の話聞きながら知識を身に付けてきた。学習指導時には難しい言葉を避け、話すスピードやイントネーションに配慮するなど、学んできたことを頭の中で繰り返しシミュレーションしてきた。実習本番前に大学生を前に模擬実習も行った。しかし、そんな授業の総まとめとして実施した日本語教育実習では、学んだことを100%活かせたかというところではなかった。実際に、日本語学校の学習者の前で授業を行った時、何一つ模擬実習通りには上手くできなかったからだ。原因は緊張と自分の想像力が足りていなかったことにあると考えている。

学習者の語彙力を推し量れず、授業の進行が滞ってしまった点がある。たとえば、「駅の北口」という言葉だが、この言葉を日常的に使用頻度が高い。そのため、日本に暮らす外国籍の学習者もよく理解しているものと思い込んでしまった。



II. 5. 日本語教員養成課程の活動報告

また、授業最後に行ったペアワークでは、私の声が届かないほど盛り上がったが、この程度の語彙や表現なら解るだろうという勝手な思い込みは誤りだった。学習者への配慮をもっと行っていれば、学習活動の質はさらに活性化されたはずである。しかし、貴重な経験を得て、想像力と思いやりを以って言葉を共に学ぶ面白さは痛感した。

今後、言葉の壁のギャップを少しでも小さくするために、日本語学習者との交流や語彙力向上のための機会を増やしていきたい。そして、今まで大学の日本語教員養成課程で学んできたことを日常においても活用し、自分の世界を広げたいと考えている。

6. 学内外での教職員や学生の取り組み

東アジアサマースクールに参加して学んだこと

21121007 池田 真理奈

2022年8月14日(日)～8月26日(金)の13日間にわたって行われた東アジア・サマースクールに参加した。奈良県・奈良市主催の東アジア・サマースクールは、グローバル社会における東アジアの発展を目指し、次代を担う人材の育成や交流を目的として実施されているセミナーである。当スクールでは、歴史・文化、環境や情報など多岐にわたる分野に精通した講師による講義のほか、奈良県内の文化遺産等に触れる視察研修や、参加者による成果発表などがカリキュラムに取り入れられていた。スクールには台湾や中国、日本各地の大学から集まった31人が参加した。

1. 講義

開講された15の講義をとおして、東アジアの文化や日本の政治、社会問題などを学習することができた。特に印象に残ったことは、格差による不安や不満が、世界各国で経済を含む多面的な対立を起こしているということである。世界全体で見ると、技術が急速に発展し、経済も急速に成長している。しかし、様々な面で競争が激化し、格差が生じている。このような状況において、軍事的衝突を避けること、安全保障と経済のバランスを均衡に保つことが平和な世界の実現にとって必要不可欠なものであることを、講義を聴講して学ぶことができた。また、人々の交流の機会の重要性に気づくこともできた。人々が他国



II. 6. 学内外での教職員や学生の取り組み

との交流を活発にし、互いの国を理解していくことで、友好関係を築きあげられる。他国を尊重し、協調していく姿勢を各国が見せていけば、こうした不安は軽減するのではないかと考えた。

2. 視察体験

2日間にわたった視察体験では、唐招提寺、橿原考古学研究所、奈良県立万葉文化館、興福寺、東大寺、法隆寺、奈良歴史芸術村を訪れた。この視察体験で、日本人は保存の天才であるということを学んだ。奈良は1300年も前から国際都市として栄え、大陸の窓口となった。大陸の様々な文化がシルクロードをとって奈良に運ばれてきたのである。他国でなくなってしまったものも、奈良には残されているものが多いという。それらの貴重な文化財は、劣化を防ぐための修復作業が施され、現在においても大切に保管されている。奈良の歴史芸術文化村では、1枚あたり約2000万円の費用をかけて修復作業がされたという絵画を見た。所有している寺社がその費用を負担しているようだ。文化財がここまで丁寧に、大切に保存されている国は珍しいとう。一度消えてしまった文化財は復元することはできない。自国の文化やシルクロードにより他国から入ってきた文化の素晴らしさを後世に繋げたいという先代達の熱い思いを継いできた日本の保存文化に感動した。



3. 他学生との交流

このサマースクールに参加することにより、アジア各国から集まった31人の受講生と交流することができた。学部や専攻も一人一人異なり、多様な立場の若者と意見を交換することができた。グループディスカッションや成果発表以外の休み時間、帰りの時間、放課後などを有意義に活用し、積極的に参加者とコミュニケーションをとることができた。他大学の学生生活や専攻、各地の

地域性、互いの将来や日本の社会問題等の議論をすることができた。日本と中国の政治体制の違いや大衆文化等、私の知らないことが沢山あった。自分達との相違点を知ることの楽しさを味わうことができた。

4. おわりに

本スクールをとおして、世界や文化に関する視野を広げることができたと感じる。日本文化の背景や文化財の意味を知った上で接した文化財は、より魅力的に感じられた。また、社会問題など、身の回りの様々な出来事について、以前よりも興味・関心を持つことができるようになり、知識を得る楽しさを改めて実感することができた。さらに、相手のことを理解しようとすることで深い友情を築くことができることを学んだ。グローバル化が進む社会の中で、今回の学びは非常に尊いものであった。今回得た学びを積極的に他者と共有し、必要であると感じた資質や能力を身に着けることで、当スクールの主旨でもある「東アジアの発展」に貢献していきたい。

Ⅲ 英米語学科

1. Tokoha University English Speech Contest

The 2022 Tokoha University English Speech Contest

The annual Tokoha University English Speech Contest was held at Tokoha's Kusanagi Campus on December 6th, 2022. A total of ten speakers participated in this year's contest. The judges were Professor Robert McLaughlin, Professor Peter Hourdequin, and Professor Kevin Demme. Ms. Mari Hamada from the Foreign Language Study Support Center (FLSSC) and seven student volunteers also assisted in this year's contest. Speakers had a choice of two topics, and this year's themes were:

1. What can people of other countries learn from Japan, and what can people of Japan learn from other countries?
2. How do you overcome stress in your daily life?

This year's winners were (1st) Meichsel Pirote, (2nd) Shoma Hikabe, and (3rd) Mayumi Uematsu. In addition, a special memorial prize was awarded to the student who demonstrated a high level of diligence and hard work in preparing for the contest. This prize honored the memories of four professors of the Foreign Language Department who have passed away while working at Tokoha. They are: Professor Catherine Sasaki, Professor and Dean Yoichi Kuwahara, Professor Tomoko Inoue, and Professor Tomoko Haraguchi. The winner of this year's memorial prize was Yukari Yagi.

These are the prize-winning speeches from the 2022 contest:

◎ 2022 年 常葉大学英語スピーチコンテスト参加者

菅尾 梨々香	河合 普英	村松 玲旺
田村 遙介	日下部 匠真	八木 友香里
Pirote Meichsel Reyes	Mayumi Uematsu	
大村 蒼	淺羽 芽依	

◎ 2022 年 常葉大学英語スピーチコンテストボランティアスタッフ

岡本 愛海	大橋 美文	加茂 優斗
青木 廉	狩野 太陽 (動画)	一瀬 朱音 (司会)
稲垣 沙恵 (司会)		

2. 高校生対話弁論大会

第 38 回静岡県高等学校英語対話弁論大会報告

第 38 回静岡県高等学校英語対話弁論大会が、11 月 19 日（土）に草薙キャンパスで開催されました。本学外国語学部主催、静岡県教育委員会後援の大会は、二人一組での対話形式で行うのが特徴で、出場生徒たちは日常生活における問題意識を反映したオリジナルのスキットを、身振り手振りを交えながら披露し会場を沸かせました。コロナ対策のためアクリル板やマスクの着用など、例年とは異なる苦労もありましたが、小道具や衣装を駆使し、躍動感のあるスキットを見せられました。

令和 4 年は県内 7 校から 12 ペア 24 人が出場しました。（A 組 10 ペア・B 組 2 ペア 計 12 ペア）英語圏滞在歴 10 カ月未満の生徒による「A 組」は 10 ペアが参加し、静岡県立静岡城北高等学校が優勝しました。海外での滞在経験の長さは問わない「B 組」は、2 ペアが参加し、静岡県立浜松江之島高等学校のペアが優勝しました。また、MVP（Most Valuable Performer）が、ペアとしての入賞は逃したものの、非常に素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた生徒に授与されました。

【結果】

A 組（3 分）：英語圏の滞在経験がない、もしくは通算 10 ヶ月以下（タイトル）

第 1 位 静岡城北高校 山中 真優さん、鈴木愛祈華さん（落語：Rakugo）

第 2 位 清水東高校 中野 綾音さん、飯田 小春さん（歩きスマホ：Texting While Walking）

第 3 位 常葉大学附属菊川高校 成島 千尋さん、三木 睦実さん（きっとそれは、世界共通の魂：It's universal）

B 組（5 分）：海外での滞在経験の長さは問わない

第 1 位 静岡県立浜松江之島高等学校

カリアオ ヒカリさん、オベデンシア サユリさん（お互いを尊重する。：Respect）

第 2 位 静岡県立浜松江之島高等学校

鈴木 佐奈さん、セベリナ レイン ムンサヤクさん (ラーメン:
Ramen)

また、英米語学科の 4 年生学生ボランティアが大会を運営し、非常に円滑に大会を終えることができました。また、司会者として、英語力・日本語表現力を活かして、大会を進めてくれました。4 年生の学生ボランティアの皆さん、本当にありがとうございました。

【英米語学科 4 年生ボランティア】

良知ゼミ：曾根 莉子、松山 幹汰

柴田ゼミ：芝原 美羽、PIROTE MEICHSEL REYES、村田 莉花、
八木 友香里、渡井 万智

【スタッフ】良知恵美子 (代表)、鈴木 克義、佐藤 由美、
柴田 里実 (英米語学科)

【審査員】Kevin Demme、Robert McLaughlin、Peter Hourdequin (英米語学科)

3. 教員採用試験合格者

夢の実現を可能にしてくれたもの

19121023 粕谷 怜杏

2022年9月30日、静岡県の教員採用試験の可否が発表され、私は合格という結果をいただくことができた。この合格をいただくまでの約半年間、苦勞することもあり、途中でやめたくなることもあった。しかし、困難を乗り越えて最終的に教師という夢の実現に大きく近づけたのは、多くの方に支えていただいたからだと思う。教員採用試験までの道のりを、筆記試験対策と面接対策の二つの面から説明していきたい。

まず、筆記試験に向けての学習についてである。3年次の1月から本格的に教員採用試験のための学習が始まった。基礎教育センターの眞木先生からご提案をいただき、専門科目の過去問を毎週解き始めたことが私の教員採用試験へのスタートになり、購入してあったテキストを開くようになった。私には、多くの教材に手を付けた結果すべてが中途半端で終わるという失敗をした経験があったため、セサミノートのみをメインの教材として用いた。空欄はすべてを覚えるために計6周は繰り返し行い、空いているスペースには言葉の意味や背景等をメモして自分だけのセサミノートを作るように意識した。教職教養に力を入れてしまい、一般教養に集中することはできなかったが、自分の苦手な分野は徹底的に勉強した。過去問から出題の傾向を調べることで、出題の確率の高い自分の苦手な教科を効率良く勉強できるのではないかと思う。勉強をする中で一番の支えとなったのは友人である。大学からの帰宅後に電話をつなぎ、範囲を決めて問題を出し合っていた。励まし合いながら、時には教員採用試験とは関係のない趣味の話をすることもあったが、勉強に打ち込むことができた。スムーズに問題を出し合うことができると喜びを感じたため、次第に、「電話の時間までに、決めていた範囲の空欄は覚える」という習慣が身につくようになった。その結果、一人で勉強するよりも楽しく早いスピードで勉強できたと思う。一人だと不安になるという方や、一人で勉強することに疲れた方にはこの方法をお勧めしたいと思う。

次に面接対策についてである。まずは5月の教育実習までに面接シートを完成

させるという目標をもって3年次の2月頃から面接シートの内容を考え始め、教職支援センターの秋山先生に添削指導をしていただいた。また、一次試験の面接の練習は主に眞木先生にご指導いただき、毎週時間を決めて面接練習を行った。教採 Guide に記載されている過去の質問内容には全て答えられるよう確認し、言いたいことを文章ではなく箇条書きでまとめるようにした。試験当日に質問された際に、伝えたいことが含まれた回答をその場の言葉で伝えられ、あらかじめ考えておいた文を暗唱していると面接官が感じてしまう話し方にならないという点で、箇条書きで準備しておくことは良かったのではないかと考えている。二次試験の集団面接の練習は、一次試験の合格が発表された日から始めた。教職支援センターによって開催された二次試験対策指導に何度も参加し、集団面接に慣れるように意識した。話を聞きながらよく聞くこと、他の受験者の意見を踏まえながら自分の意見を言うこと、話題提起をしたり、まとめたりすることなど、意識することは多くあるが、自分ができる最大限を發揮することが重要だと思う。面接については、個人においても集団においても、場数を踏み、自分の考えや意見を話すことに慣れることが重要だと感じた。

以上のように、学習面でも面接面でも、協力し支えてくださった先生方、仲間がいたということ、そしてそのような人々の存在が私にとってとても大きかったということのを改めて実感した。一人では成し得なかったことであるので、支えてくださった方々に心から感謝を申し上げたいと思う。今年の4月から教壇に立つことになるが、教員採用試験までの取組み、多くの方への感謝や初心を忘れずに邁進していきたい。

コツコツは勝つコツ

—誰にでも誇れる英語教師になるために—

191211102 森 双葉

私は昨年の夏、静岡市の教員採用試験を受験し、無事合格することができた。したがって、今年の4月から、いよいよ「森先生」として教壇に立つことになる。中学1年生の頃からひたむきに努力し、およそ10年間、人生の一つの目標とし

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

て目指してきた「英語教師」という夢を自らの手でつかみ取ったことに、自分自身、誇りを持っている。私が英語教師になれたのは、これまでにコツコツと努力をしてきたからという理由以外何もない。

英米語学科に入学してから、自身の英語力を磨いてきた。その例を二つ紹介する。まずは4技能の中で最も苦手としていたリスニング力の向上であり、私はTOEICリスニングPart 3やPart 4の問題を「一日一問」回答することを習慣とした。また、更なるスキルアップのために、ディクテーションとシャドウイングを行った。ディクテーションをして、自分が聞き取れない部分を分析する。それにより、音の連結、脱落、弱化、同化等の英語特有の音の変化に気づいた。そして、自分で正しい音を出せないと正しく音を認識することができないという音声学の知見を信じ、シャドウイングをする際にはそのことを意識して取り組んだ。「一日一問」であれ、技術の向上を意識すると30分かかったこともあった。これを1年間繰り返したところ、少しずつ英語を聞けるようになっていく自分に気づいた。もう一つは、発音矯正である。英語の発音がきれいな先生に魅了されて英語教師を目指したことから、私自身も綺麗な発音の習得には力を注いだ。やはり、英語特有の音の変化に焦点を当て、時間があれば、英語の発音に1時間ほど集中した。おかげで英語の発音に自信を持てるようになり、スピーキングのパフォーマンスも向上した。このように大学4年間の中で、わずかな時間も有効に使い、自身の英語に磨きをかけてきた。

英語教育学を専攻している身として、スキル面だけでなく語学教育に関する学術書を読み、知見を深めてきたことも事実である。大学で使用する教材以外に、自身が尊敬する研究者の著書に目を通し、大学での学修の質を深めてきた。そして、より良い授業の在り方、例えば、4技能総合型学習、オーセンティック教材の積極的な導入、CLIL（内容言語統合型学習）等についてそのアイデアを膨らませてきた。授業で使えるものは積極的にメモを取り、常にアンテナを高く張ることで、学校現場で求められる英語授業について日々模索してきた。

このように、英語を専門とする教師になるという自覚と責任、使命感をもって、コツコツと英語力、授業力等に磨きをかけてきた。教員採用試験の対策はその延長線上である。教員採用試験の対策が対策用テキストや過去問を解くことだと思ったら大きな間違いである。大学での4年間で行ってきたすべての努力が結果

に結び付く。それを肝に銘じ、これからの学修への態度を今一度見直した上で、英語教師という職業を目指すべきである。そして、教員採用試験の合格を手にしたとき、それまで以上に身が引き締まる思いを覚えた。これから教師になるからこそ、さらに授業力を磨こうと英語教育の知見を深めたり、これまで以上に ICT を用いた授業の在り方についてシンポジウムに参加したり著書を読んだりしてアイデアを吸収し、また、自分なりの授業について考えを巡らせてきた。

このように、「コツコツは勝つコツ」を自身への戒めとして努力をしてきたが、これが教師を目指す人に求められる姿勢だと信じている。そして、常に向上心を持ち、前向きな姿勢を持っている教師が、教える生徒やその保護者の方々、そして自身の家族や友人等に誇れる教師であり、自他ともに認められる姿となれるのではないだろうか。本気になって努力する人を皆応援してくれる。英語教師を目指す以上、誰にでも誇れるような価値ある教師を目指すべきであるし、私自身も、たとえ小さな努力であれ、それを軽視することなく、日々コツコツと努力をし、周りの人に誇れる教師になれるよう励んでいきたい。

教員採用試験受験を通して学んだ 3 つのこと

19121116 渡井 万智

私が教員採用試験合格を目指して過ごした 4 年間で学んだことは、主に 3 つある。第一に、経験することが自身のやりたいことを見つける近道になるということである。第二に、何事も最初から諦めてはいけないということである。第三に、辛い時は、周囲の人の存在が何よりも救いになるということである。本稿では、この 3 つに焦点を当てて、大学生活を振り返りたい。

「経験することが自身のやりたいことを見つける近道になる」ということを学んだのは、大学 3 年次の秋頃から始めた特別支援学校でのボランティアでのことだった。

私は、中学校の英語教員になることを目指すために常葉大学に入学した。しかし、教職課程を履修する中で「本当に中学校の英語教員に向いているのだろうか」と考えるようになった。それからというもの、自己分析を徹底的に行ったが、自

Ⅲ. 3. 教員採用試験合格者

分に向いている仕事や興味のあることが明確にわかることはなかった。進路に悩み始めた時、特別支援学校の小学部へボランティアに行く機会があった。ボランティアを通して様々な児童と関わる中で、「特別な支援を要する子どもたちのために、自分にできることは何だろう」「もっと特別支援教育について学びたい」「特別支援教育に携わる仕事がしたい」「特別支援学校の先生になりたい」と考えるようになった。このような考えは、机上で自己分析していただいただけではわからなかった。実際に経験したからこそ、明確な目標を見つけることができたのである。

次に、「何事も最初から諦めてはいけない」ということを学んだのは、教員採用試験合格までの、険しかった道のりからである。

英米語学科に所属する私にとって、特別支援学校教諭普通免許状取得の見込みはなかった。そのため、特別支援学校の教員になりたいという気持ちはあっても、現実的には無理だと諦めていた。しかし、静岡県の特別支援学校教員採用試験の受験資格を知り、「私にも特別支援学校の教員になるチャンスがあるなら、全力で頑張ろう」と思い、勉強を始めた。英語力向上に加えて、一から学び始めた特別支援教育の専門知識、面接練習等、試験までの道のりは決して楽なものではなかった。「専門的に特別支援教育について学んでいない自分は、合格できないかもしれない」という考えになり、何度も諦めかけた。しかし、「ここで諦めたらきっと後悔する」と思った。だから、自分なりのペースで少しずつ努力を重ねた。その努力が実り、目標を叶えることができた。最初から諦めていたら今の自分はいなかった。諦めないことが、目標を叶える唯一の道だと実感した。

教員採用試験に向けて勉強していく中で、「辛い時は、周囲の人の存在が何よりも救いになる」ということも学んだ。友達に電話して悩みを聞いてもらい、様々な先生に相談した。家で泣いていた時は、家族に励ましてもらった。勉強や面接練習が辛い時は、教員採用試験合格を目指す教職仲間と何度も励まし合った。おそらく、一人だったら乗り越えられなかっただろう。振り返ってみると、毎日多くの人に支えてもらっていたことに気づいた。友達、先生、家族、教職仲間、支えてくれたすべての方に感謝したい。

最後に、教員採用試験合格を目指して過ごした大学4年間を通して、多くの事を経験し、学ぶことができた。この大学生活を通して学んだことを、これから始まる教員生活に活かしていきたい。

IV グローバルコミュニケーション学科

1. 海外事情談話会 (GC 学科コロキウム)

海外事情談話会

若松 大祐

グローバルコミュニケーション学科では有志の教員を中心に、毎月、海外事情談話会の開催を目指している。いわばグローバルコミュニケーション学科のコロキウムである。そもそもは、学内共同研究「外国語学部グローバルコミュニケーション学科の教学内容の向上のための比較地域研究」(平成 27 (2015)-29 (2017) 年度) の一環として、2017 年度より始まった。目的は、学科教員が近年の研究内容や出張内容を報告し、自身の関心を参加者と共有するところにある。2017 年度は 5 回、2018 年度は 3 回、2019 年度は 1 回、2020 年度は 2 回、2021 年度は 4 回というふうに参加してきた。

2022 年度は谷誠司学科長のイニシアティブの下、3 回開催できた。前期(春学期)に開催が集中し、残念ながら後期(秋学期)に開催がなかった。来年度は、より多くの教員がより多く開催できるように尽力したい。

第 1 回

日時：2022 年 5 月 11 日 (水) 17 時 00 分から 17 時 40 分まで

会場：静岡草薙キャンパス A305 室

講師：若松大祐 (グローバルコミュニケーション学科・准教授)

題目：本学歴史資料館蔵の木宮泰彦資料のデジタル化の状況

要旨：本報告は、2021 年度末から試験的に始めた木宮泰彦資料のデジタル化について、現状を紹介する。例えば、木宮泰彦の卒業論文「鎌倉時代に於ける禅僧と武士との関係」(東京帝国大学、1913 年)の原本と、専門業者による撮影画像と、若松によるスキャン画像を比較し、それぞれの長短を確認してみる。現在のところ、本学歴史資料館はほとんど開かずの間と化してしまい、関係資料を容易に閲覧できない。デジタル化した木宮泰彦資料は、歴史家の営為を改めて今に伝えるし、常葉大学に関係する人々をして建学の精神に触れさせしめるきっかけにもなる。

第 2 回

日時：2022 年 7 月 6 日 (水) 17 時 40 分から 18 時 00 分まで

会場：静岡草薙キャンパス A305 室

講師：若松大祐 (グローバルコミュニケーション学科・准教授)

題目：国立国会図書館デジタルコレクションの利用のすゝめ

要旨：本報告は、国立国会図書館のデジタル化の成果を勝手ながらに紹介する。特に、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)の「個人向けデジタル化資料送信サービス」(2022 年 5 月 19 日開始)の利便性を強調し、大いに利用を勧めたい。利用するには、「登録利用者(本登録)」が必須である。

(付記) 報告後に気付いたこととして、「個人向けデジタル化資料送信サービス」の対象書籍に、木宮泰彦の論著が多く含まれている。つまり、『日華文化交流史』や『日本古印刷文化史』が、自宅やスマートフォンで気軽に閲覧できる。

第 3 回

日時：2022 年 7 月 6 日 (水) 18 時 00 分から 18 時 45 分まで

会場：静岡草薙キャンパス A305 室

講師：三村友美 (グローバルコミュニケーション学科・講師)

題目：仮説「ヨウニ・ヨウナの接続法」

要旨：本報告は、スペイン語の接続法に着目し、スペイン語学習におけるよりわかりやすい「叙法選択教法」を提案する試みである。日本語話者へのスペイン語教育において、既習の英語学習の際にはなかった、スペイン語学習ならではの注目事項として、「叙法選択：直説法と接続法の使い分け」が挙げられる。これに関して、画期的な分析とまとめを行った和佐(2005)の分析を紹介・分析しつつ、そこに報告者自身の教育現場経験も併せて、より効果的な「西語習得のための『叙法選択教法』」を提示したい。

2. 多言語レシテーション大会

第9回多言語レシテーション大会

若松 大祐

多言語レシテーション(暗唱・朗誦)大会が、2022年12月17日(土)に本学静岡草薙キャンパスA棟2階A201教室で開催されました。目的は、古今東西の詩歌を詠みあげて、その詩歌を生み出したその時その場所を、今ここ静岡に再現することにあります。大会で登場した詩歌はいずれも、それぞれの言語が持つ時間の長さや空間の広がりなどを私たちに伝えてきたことでしょう。

この大会は、常葉大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科が主催するものです。そもそもは外国語学部創設30周年を記念して2014年に始まり、今年で第9回を迎えました。学部創設以来の伝統と定評ある英語やスペイン語の教育だけでなく、中国語、韓国語、ポルトガル語の教育をも加えた外国語学部でのグローバルな学びを、参加者が互いに励み共に楽しむことのできるイベントとして、毎年12月に実施されています。出場者は中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語の課題文(詩歌や文学作品の一節)を暗唱・朗誦し、発音や表現力を競います。

今年の第9回大会には、「ソロ部門」(独演)と「ペア部門」(対話)という部門を新設します。これに伴い、「レベル1」と「レベル2」というレベル分けを廃止しました。課題文の難易度は、「ソロ部門」が旧「レベル1」に、「ペア部門」が旧「レベル2」に対応します。

また、新型コロナウイルス感染症への感染を避けるために、昨年と同様に無観客の対面形式で実施しました。無観客とはいえ、感染対策を実施した上で、約50名の参観者の入場を認めました。

こうした開催形態にもかかわらず、スペイン語、中国語、ポルトガル語、韓国語の四言語をあわせ、のべ53名(ソロ部門31名、ペア部門11組22名)の出場があり、うち2名はグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムである二言語学習を反映して、二言語でのレシテーションに挑戦しています。さらに参加者の内訳を見ますと、外国語学部グローバルコミュニケーションの学生のみなら

ず、英米語学科の学生（1名）も参加しています。さらに、静岡県内の高校生（14名）の参加もありました。昨年と同様に、「コロナ禍であっても外国語を学び続ける」という気持ちが、出場者と主催者に共有されていたのでしょうか。

ただし、昨年に比べ、出場者数が3割減になりました。ちなみに、昨年の第8回は無観客の対面形式で実施し、出場者がのべ76名（Level Iが56名、Level IIが20名、うち二言語出場者7名、静岡県内高校生29名）でした。

常葉大学に集い外国語を学ぶ若者たちの熱演に対し、審査員が暗唱力、発音、表現力を審査します。会場では約50名の出場者、そして主催者やグローバルコミュニケーション学科の在学生の有志らが大きな拍手を送ります。当日の様子は、『静岡新聞』が「4言語で詩歌暗唱 発音や表現力競う 静岡・常葉大」（2022.12.22）で簡単に伝えています。なお、1月18日（水）には草薙キャンパス内で表彰式を開催し、上位入賞者に賞状と賞品を授与しました。

また、学生実行委員による特別企画として、大会開始前に出場する高校生から希望者を募り、グローバルコミュニケーション学科の学生が常葉大学草薙キャンパスを案内しました。大会終了後には、有志を募って交流会を開催し、参加者がグローバルコミュニケーション学科の教学内容に関連するクイズを楽しみました。このように、レシテーション大会は在学生同士の、また大学生と高校生の交流の場でもあります。

本誌には、韓国語 Pair 部門1位の栗原菜摘さんの感想、韓国語 Pair 部門2位の戸崎さくらさんの感想、スペイン語 Pair 部門で1位の「nieve」の鈴木桜子さんと堤彩華さんの感想をそれぞれ収録しました。来年度はさらに多くの投稿があるのをお待ちしております。

<入賞者一覧>

中国語 Solo 課題：王翰《凉州词二首 其一》

- 1位 土屋 有輝 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年
- 2位 落合 優音 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年
- 3位 ガリエゴス 葵 静岡県立静岡城北高等学校3年

IV. 2. 多言語レシテーション大会

中国語 Pair 課題：胡适《终身大事 -- 游戏的喜剧》

1位 M&A's

二ノ宮 未聖 静岡県立吉原高等学校 2年

加藤 杏菜 静岡県立吉原高等学校 2年

2位および3位 なし

ポルトガル語 Solo 課題：Gonçalves Dias “Canção do Exílio”

1位 望月 来瞳 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1年

2位 長沼 杏那 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2年

3位 諏訪 奈摘 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2年

ポルトガル語 Pair 課題：Vinícius de Moraes *Orfeu da Conceição*

1位 にかるか

赤堀 虹花 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 4年

奥田 琉華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3年

2位 As guerreiras

浅沼 芳華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2年

増田 里花子 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 2年

3位 後で決めます。

深澤 拓郎 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3年

水口 奈々子 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 3年

韓国語 Solo 課題：황지우 「너를 기다리는 동안」

1位 杉山 実乃梨 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1年

2位 星野 伽蓮 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1年

3位 大石 愛海 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1年

韓国語 Pair 課題：작자 미상 「범 내려온다」

1位 ミルガル

栗原 菜摘 外国語学部グローバルコミュニケーション学科 1年

笠井 呼夕伎 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

2位 ビビゴ

戸崎 さくら 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

浦田 愛 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

3位 ピスタチオ

鈴木 もえ 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

佐藤 茉央 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

スペイン語 Solo 課題：Federico García Lorca “CANCION TONTA”

1位 大木 萌々華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

2位 オルタ ブライアン 静岡県立吉原高等学校3年

3位 佐口 健心 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

スペイン語 Pair 課題：Federico García Lorca “ROMANCE SONAMBULO”

1位 nieve

鈴木 桜子 外国語学部グローバルコミュニケーション学科2年

堤 彩華 外国語学部グローバルコミュニケーション学科2年

2位 MJ

井瀬 雄大 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年

谷崎 遥 外国語学部グローバルコミュニケーション学科3年

3位 アミスタ

谷津 亜門 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

中村 真大 外国語学部グローバルコミュニケーション学科1年

第9回は、下記の入賞者はありません。

- ・二言語入賞者：二言語を学ぶというグローバルコミュニケーション学科のカリキュラムの特徴を踏まえ、二言語の暗唱にチャレンジした学生の中から、合計得点の高い順に入賞者を決定します。
- ・審査員奨励賞：高校生を対象とした賞です。

IV. 2. 多言語レシテーション大会

< 審査員 >

スペイン語：岩崎 ラファエリーナ（常葉大学非常勤講師）、

増井 実子（常葉大学教員）

中国語：盧 思（画家・京劇俳優）、戸田 裕司（常葉大学教員）

ポルトガル語：ホザンジェラ 岩瀬 マルチンス（常葉大学非常勤講師）、

江口 佳子（常葉大学教員）

韓国語：崔 慶原（常葉大学教員）、柳 采延（常葉大学教員）

< 学生実行委員 >

[実行委員長] 内野圭悟

[実行委員] 大長優斗、森下莉紗、秋山ひより、石川和磨、伊藤たかし、佐藤多代

[ボランティア] (2年) 蒲生有桜、佐野綾香、清水理那、SHIMONO EMILY

YUKARI、竹田祐花

(1年) 杉山春樹

(以上、本学外国語学部グローバルコミュニケーション学科生)

< 教職員 >

江口佳子（統括、学生補助）、谷誠司（審査、編集）、崔慶原（編集）、戸田裕司、
増井実子（高校）、三村友美（会計）、柳采延、若松大祐（編集）

< 共催 >

フローリスト花便り まるそ花店（曾根田成、GC 学科 2019 年卒）

< 公式サイト >

<https://sites.google.com/site/tokoharecitation>

常葉大学多言語レシテーション

パンフレット巻頭言より再録

レシテーションを体感しよう

外国語学部長 戸田 裕司

私はグローバルコミュニケーション学科で中国語や中国文化を教えているのだが、中国のあれこれについて「実はあんまりよくわかっていないな」と思うことがしばしばある。

レシテーション (recitation) を中国語では〈朗誦〉と言う。「朗読」という言葉があるが、その意味は「文章・詩文などを声に出して読むこと」¹である。中国語の〈朗誦〉は「大きな声で詩あるいは散文を朗読し、作品の感情を表現する」²ことである。私も、(下線部を気にも留めぬまま) とりあえず辞書に書いてある通りに理解し(たような気になっ)ていた。

2018年の3月、私は海外実習(「臨地実習C」開講前の試行プログラム)の引率で、協定校の閩南師範大学外国語学部を訪れていた。そこで知り合った先生(確か英文学の先生だったと思う)から「私の家」に遊びに来ないかと誘われた。

てっきり彼が家族と生活している「家」かと思っていたのだが、行ってみると本や骨董が並べられた「サロン」のような部屋であった。しかも閩南師範大学の先生方や共産党の幹部など10名を超える人たちが集まっていた。

これは一体何が始まるのだ? と不安な気持ちで、適当に雑談に合わせたら、急に1人の先生が我々の円陣の真ん中に進み出て、身振り手振りを交えながら詩を朗々と唱えはじめた。直立不動で朗「読」するのではなく、時に身をよじり、手を天に突き上げながら、まさに朗「誦」していたのだ。

その人の朗誦が終わると、順番に皆がそれぞれ思い思いの詩や文章の朗誦を披露するというのが、この集まりの趣旨であったのだ。別に古典に限らず、本人が好きなものでよいようだ。高尚なカラオケ…という失礼にすぎるだろうか。日

¹三省堂『新明解国語辞典』第2版。

²商務印書館『現代漢語詞典』第6版。

IV. 2. 多言語レシテーション大会

本のカラオケも苦手な私には、かなり精神を奮い立たせなければついていけないものではあったが、「ああ、これが中国のレシテーションか！」と腑に落ちたひと時でもあった。

私たちがここで体験する「レシテーション」は、日本に住むわたしたちなりのレシテーションに過ぎない。しかし、特に出場者の皆さんは、課題文の語彙・文体・ロジックから文化の息吹を体感することができたと思う。そして出場者の熱演が、文化の魅力を聴衆にまで感染させてくれるものと信じている。

「暗唱」、AI時代だからこそその魅力

グローバルコミュニケーション学科長 谷 誠司

本年度も「多言語レシテーション大会」を開催することができ、本当に嬉しく思っております。難しい状況下で参加を決めた出場者、引率者の高校の先生方、聴衆として参加する皆さん、そして実行委員の学生には心から御礼申し上げます。

昨今、AI技術の発達により外国語学習の意義が問われています。海外でもスマホの翻訳アプリを使えば、大概のことは事足ります。そうした社会変化の中で外国語の詩や戯曲を暗唱することには、一見実利的な有用性はあまりないように思えるかもしれません。

でも、本当にそうでしょうか？

外国語の詩や戯曲を覚えること。それは、それぞれの言語が持つ、リズムや音の響き、ものの見方や大切にしていることを、無条件に自分のからだの中に取り込むことでもあります。自動翻訳がいくら便利になったとしても、それはただ眼鏡のようなものです。眼鏡は外してしまえば見えなくなります。でも、暗唱した詩や戯曲はからだに染み込んでいきます。暗唱することで母語以外の世界観や価値や思考などをからだの中に取り入れ、それによって皆さん自身の思考や行動も多様化し、複眼的にモノを見ることができるようになるのです。

仕事でも生活でも、今後ますます「多様性を認める」ことが大切になります。その時、相手の文化的な背景を理解していることは、非常に有効です。暗唱した

詩や戯曲の一節を披露するだけで、お互いの距離はグッと近くなるでしょう。外国語を学ぶことは単に「話せる」だけでなく、その言語が生まれた背景や使う人たちの文化や思考を理解し「共に生きる」ことが目的です。一見無駄に見えることが、皆さんの血や肉になると信じています。どうか日々の努力の成果を惜しみなく発揮できますように。

聴衆の皆さんも大いにお楽しみになり、出場者に惜しみない拍手を送っていたければ幸いです。

入賞者より

韓国語 Pair 部門 1 位

失敗を恐れずに

栗原 菜摘

「レシテーション、一緒にやらない？」と友達から声を掛けられたのが始まりでした。韓国語を習い始めたばかりで迷いましたが、ペア部門での参加であること、またこれをきっかけに韓国語が上達していけばいいなあという思いから参加を決意しました。本番までの練習期間は1か月ほどで、ペアと一緒に練習出来るのは週1回程度でした。その中で崔先生にご指導頂きながら何とか本番を迎える事が出来ました。

まず、何から始めればよいのか…。2分程の話に一通り目を通し、暗唱する作品「범 내려온다」のあらすじを読み、内容を把握し、そして担当の役を決めました。勿論、スラスラと読む事は出来ないので、最初は振り仮名を書き込み、音読を繰り返し行うようにしました。先生の録音して下さったモデル音声を聴きながら抑揚を真似してみたり、個人での練習の時は覚えにくい所を中心に練習したりしました。回数を重ね、暗唱はだんだんと出来てはいきましたが、発音の習得は正しい発音を理解するところから始めなければならず、難しかったです。特に濃音と激音が混ざっている「땅이 툇 꺼지는 듯」の部分に苦勞しましたが、曖昧な部分は先生に積極的に質問し、正しい発音を教えてもらってから発音するようにしました。

IV. 2. 多言語レシテーション大会

ペアとの練習の時は声の大きさ、間の取り方、身振り手振りもつけ加えて、1人では出来ない事を集中して行いました。私の個人的な感想ではありますが、身振り手振りをしながらやると場面の様子や心情が浮かび易くなり、本番で緊張している時に助けの要素になると思います。

そして、大会の前日には最終確認として他のペアとの合同練習も行いました。本番同様スタンドマイクを使い、通しでの練習をお互いに見てアドバイスをし合ったり、練習風景を動画に撮ってもらい、お客さんからの見え方も考えて直した方が良いと思うところの修正を行いました。本番に向けて沢山練習を行い、準備しました。レシテーション大会では暗唱・正確な発音ができているかが重視されますが、何よりも楽しんでやるのが大切だと思います。

レシテーションをやり遂げて思う事は、失敗を恐れず、まずは挑戦してみる事、それに限ると思います。上手にやろうなんて思わなくて良いと思います。私のように人前が出る事が苦手である人は、友達と参加出来るペア部門から挑戦してみるのもよいかもしれません。今、私は参加して良かったと思っています。韓国語をしっかりと学び、将来的には会話が出来るようになる目標を持っている私には、この経験が自信へとつながりました。



韓国語 Pair 部門 1 位「ミルガル」の栗原菜摘と笠井呼夕伎



韓国語 Pair 部門 2 位「ビビゴ」の戸崎さくらと浦田愛

韓国語 Pair 部門 2 位

苦手な事にも挑戦

戸崎さくら

私は、2022 年 12 月 17 日に開催された第 9 回多言語レシテーション大会に韓国語のペア部門で参加した。この大会に参加した理由は、単純に自分がどこまで韓国語が出来るか気になったからだ。課題文の「범 내려온다」を実際に練習してみると、発音が難しい部分が多く、特に卒, 얼췌덜췌, 잔뜩, 감짜, 우뜩のような濃音にとっても苦戦した。日本語には無い発音の仕方な為、発音できるようになるまで何回も先生の発音を聞き、真似して練習した。発音だけでなく、表現の仕方にもとても苦戦した。虎が降りてきて怖がっている仕草をどう表現すればいいのか、驚く様子はどう表現すれば、聴衆に伝わるのか、劇などをやった事のない私達にとっては初めての事だらけだった。人前に出るのが苦手な私にとってはより難しく感じた。

最初の練習では、慣れない事もあって照れてしまい、上手く表現することが出来なかった。そこで、崔先生は私達にたくさんのアドバイスを下さった。どう表現したら良いか分からない所は、手本となる実際のパンソリ動画を見せてく

IV. 2. 多言語レシテーション大会

ださったり、色んなアイデアを出しながら動作を一緒に作ってくださったり、毎回親身になって教えてくださった。練習を重ねていくうちに、作品に対する理解が深まっていき、私たちは虎に遭遇して怖がるどろ亀の戸惑う様子を表現できるようになった。先生からは、虎が急いで山を降りて来る様子がリアルに描写されていると評価していただいた。こうして練習の回数を重ねる毎に自信がついていった。そして、本番では堂々と作品を披露することが出来た。

本番を終えてみて沢山の学びがあった。それは、やったことがない事に挑戦することの大切さだ。今更かと思うかもしれないが、とても大切な事だと私は実感した。私は人前に出るのがとても苦手だったが、大勢の人の前で作品を披露した時、意外にも楽しいと感じた。「私は人前で何かを表現するのが楽しいんだ。」と感じ、その後の成績発表で入賞したことにより、「苦戦していた韓国語もこんなに上達するんだ。」と新しい発見があった。それだけでなく、友達と二人で苦手な事をやり遂げだ達成感も凄くあった。このことにより、今まで自分がやってこなかった事、苦手な事にも挑戦することの大切さを、身を以て体験することができた。

今回の挑戦は私にとって将来の自分を作るためにとても大事な経験であった。工夫を重ねながら、自分の限界を乗り越える経験をこれからも大事にしていきたい。

スペイン語 Pair 部門 1 位

挑戦のその先の景色

nieve : 鈴木 桜子
堤 彩華

今回レシテーション大会スペイン語ペア部門に出場し、一位を取ることができました。まずは指導してくださった先生方に感謝を申し上げます。

私たちは昨年のスペイン語レベル 1 に出場した経験があり、新設された“ペア部門”に興味を持ちました。しかし、ペア部門の課題詩はソロ部門より難易度が高くなるため、練習する時間が確保できないということから出場を躊躇っています。

した。そんな時、昨年に出場した時の充実した気持ちを思い出し、挑戦する意義と達成感を得るために今回も出場することに決めました。

スペイン語ペア部門の課題詩は、ガルシア・ロルカの『夢遊病のロマンス』でした。練習では、まず完璧な暗記を目指し、それと同時に単語のクリアな発音を心掛けました。モデル音声を聴き、わからないところは先生にご指導いただきながら改善していきました。二人での練習時間の確保が難しかったため、個人での練習を主に行いました。そして二人で練習できる時にはより豊かに表現するためのジェスチャーを考え、余韻を残すような言葉の抑揚やテンポに気を付けました。またペア感を出すために本番の衣装の色も合わせました。

本番は緊張しましたが、発表直前まで納得のいくまで練習をし、表現力を高め合ってきたので、練習してきたすべてを出し切るという気持ちで挑みました。結果として自分たちの最善のパフォーマンスをすることができ、ロルカの詩の世界観を二人で表現できたことが評価され、一位を取ることができました。審査員から「verde que te quiero verde というこの詩独特の繰り返し表現でうまくリズムに乗りながら、馬、髪、眼、月、星といった詩を構成するキーワードを印象的な身振りで表現し、息の合った美しい暗誦を披露してくれた」という講評を得たのも嬉しかったです。

ペア部門は、二人で発表をするために挑戦しやすく、二人が力を合わせて一つの作品を作り上げる楽しさに魅力があると思います。舞台上で隣にパートナーがいる、これは何よりの支えでした。出場を通してスペイン語学習へのモチベーション向上に繋がり、失敗を恐れずに挑戦する大切さも感じることができました。このような機会がなければ私たちは人前でスペイン語を披露することはなかったと思うので、大会を企画運営して下さった実行委員の方々にも感謝いたします。

「言語学習では失敗を恐れずに挑戦し続けることが大切である」ということを今回私たちは学びました。興味はあるけれど人前に立つことが苦手で挑戦することを躊躇っているGC生がいるならば、ぜひ来年はチャレンジしてみてください。その先には、見たことのない景色が広がるはずですよ。

IV. 2. 多言語レシテーション大会



スペイン語 Pair 部門 1 位「nieve」の鈴木桜子と堤彩華

3. 社会人基礎力養成

静岡が抱える社会課題の解決に挑戦した学生たち

谷口 茂謙

2022年度は初めて協働研究セミナーⅡを担当した。幸い、有志の学生が7人も履修してくれた。シラバスで予め、静岡が抱える社会課題の解決を協働で研究する旨を告知したので、集まった学生たちは、社会貢献に対する意識が極めて高い学生たちであった。GC学科3年生の1割程度の人数だが、チームで協働して社会貢献をすることに、これほどまでに意欲ある学生たちが育っていることは、学科の教育の成果である。その学生たちには、何か大きな成果を手にかけてやりたいと、私も意気込んで授業を始めた。

静岡が抱える社会課題の一つに人口の減少がある。これに歯止めをかけるための方策として、学生たちにできることを考えるよう指示した。静岡県、静岡市、厚生労働省などの資料を手分けして読ませ、人口減少という課題を引き起こす原因について考えさせた。その一例として、東京への一極集中が挙げられた。しかし、東京に若者を引きつける魅力がたくさんあることは事実であり、それに優る魅力を自分たちの力で静岡に創り出すことは不可能であった。また、子供を持ちたいと思いつつ持つことに積極的になれない状況があるとわかり、そのために何ができるかを学生たちは議論した。経済的支援や子育ての悩みを解消するための社会的支援が必要であることがわかった。だが、自分たちの力で何ができるのか。すでに、各自治体がいろいろと対策を講じている中で、それに優る対策を、自分たちの力で実現できる見込みはないことを、学生たちは思い知った。

学生たちが自分たちの進む道を見つけられないまま、数回の授業が過ぎた。何か疑問やアイデアが出たらすぐにインターネットを使って調べられるようにするために、私はPC教室を指定して授業を進めていたが、ある日、リーダーの学生から「学生同士で対面して議論できる教室にしてほしい」との要望を受けた。全員が横並びで前を向くPC教室では、お互いの意見を言い辛く、効果的な話し合いができないとのことであった。自分たちが感じている問題を告げ、環境の改善を要望する姿勢を、私は頼もしく感じた。自己の利益だけを考えて環境の改善を

IV. 3. 社会人基礎力養成

望むのであれば、社会人として未熟である。だが、リーダーの学生からは、環境を変えれば結果を出すことができるという確信が伝わってきた。自分たちの進む道を見つけ出すための前向きな要望をはっきり述べてきた。そこに頼もしさを感じたのである。

さっそく次の授業からは、ノート PC を各自で使うことができる小教室を確保した。その日から、議論は実現可能性を重視する方向に動いた。人口減少という大きな課題に対する直接的な解決策を導くことは難しいので、もっと課題の範囲を絞り込もうというのである。そこで、子育て支援に資する対策として、これまでにない新たなものを自分たちで考えることにした。オリジナルの絵本の制作というアイデアが出るまでに、さほど時間はかからなかった。図書館に行き、手分けして参考とする絵本を手に入れ、その特徴について報告しあい、絵本に必要な要素を確認した。そして、それらに合わせて、自分たちでオリジナルの物語を考えることにした。偶然の幸いには違いないが、物語を創作できる学生と、それにふさわしい絵を描くことができる学生がいたのである。試作品として提出された物語に、他の学生たちが賛同していろいろと改善意見を出し、作者の学生の意見を尊重しながらも、より深みのある物語としていった。さらに、物語の世界をわかりやすく表現する絵が加えられた。後に、印刷会社の編集担当者からも、本格的な描き方ができていると、お褒めの言葉をいただく出来映えであった。進む方向を見出し、全員でそれを見据えることができた学生たちである。その後の協働研究は順調に進み、前期の終了時には、原稿の完成を見ることができた。本学名誉教授で絵本の専門家であいらっしゃる古橋和夫先生に監修のご協力を得られたことも、プロジェクトを推し進める大きな力となった。夏季休暇の終了時には印刷会社に完成原稿を渡し、後期の授業はその初校の検討から始めることになった。

順風満帆に見えた学生たちのプロジェクトだが、大きな問題が立ちはだかった。彼らは、地元企業に出資してもらって絵本を出版し、静岡県内の子育てに関連する施設に配布することを計画していた。しかし、学生たちが私的に行うものではなく、授業の一環として行うプロジェクトに、企業から資金の支援を得ることは、大学から許されなかった。事実上は寄付を募ることになるためである。出版の道が閉ざされたことを彼らに伝える際には、このプロジェクトを途中で投げ出されても致し方ないと、私自身は覚悟していた。その後の授業をどうするか、新たな

課題を彼らに考えさせるつもりであった。ところが、学生たちは、リーダーを中心として、立派な話し合いをしてくれた。自分たちのやりたかったことの原点に立ち返ろうというのである。オリジナルの絵本を出版することが、自分たちの当初の目標ではなかったはずである。地元の企業と協力して、静岡の人口減少に歯止めをかけることが、この授業に参加した時の目標であった。それを達成するためには、出版することだけが方法ではない。どうしたらよいか。私は、担当教員として、何の助言もしていなかった。今後、どうしたらよいかを話し合うよう指示しただけである。自分たちが目指す方向に問題が発生し、それを解決できない時に、原点に立ち返ってもう一度全員で当初の目標を確認・共有し、別の道を見出そうとする。その姿勢は、どの社会でも立派に通用する人材であることを証明している。改めてこれまでの学科の教育の成果を、私はひしひしと感じていた。

議論の結果、学生たちは、出版よりも手軽に、自分たちの絵本を子育て世代の人々に活用してもらう方法を考えた。作品を電子ファイルにして、インターネット上にアップロードし、URLを知っている人は、誰でもアクセスでき、絵本を読んでもらえるようにするのである。そして、多くの地元企業に協力を呼びかけ、各企業のウェブサイトで、絵本の URL を広報してもらうことを計画した。経済的支援を求めはしない。ウェブサイトで URL を紹介しただけである。さらに、協力してくれた企業については、絵本のウェブページで、企業名を一覧で掲載することにした。企業側にも協力するメリットがあるように工夫したのである。

企業に協力を呼びかける手始めとして、メロディオンを製造する株式会社鈴木楽器製作所様を選んだ。絵本の主人公が鍵盤ハーモニカの奏者だからである。直接に企業を訪れ、協力を依頼するプレゼンテーションを行うことにした。その準備は周到に進められた。授業時間以外にも練習を重ねたとのことであったが、大きな助力となったのは、静岡新聞様による取材であった。駄目で元々という気持ちで、取材をお願いしたところ、リハーサルの授業から取材をして下さり、さらに、鈴木楽器様での本番に向けて、有益な改善の助言までして下さったのである。「現在は絵本だけの状態だが、将来的には、背景として音楽を流し、朗読による音声も加える計画である。『音楽にはもちろんメロディオンの音を使わせてもらいたい』というアイデアを述べれば、先方にとってさらにメリットになる」との助言は、私だけでなく、学生たちも思いつかなかった。鈴木楽器様での本番も取

IV. 3. 社会人基礎力養成

材して下さり、その様子と合わせて、12月17日の朝刊に記事として掲載していただくことができた。



学生たちの絵本プロジェクトは、物語に最も関係のある企業からの協力を得ることができ、活動の様子を新聞記事で紹介してもらったこともできた。それだけでも、かなり大きな成果を収めていると言える。しかし、学生たちは、まだ目標に到達したわけではないことを理解している。より多くの地元企業に協力を呼びかけ、一社でも多くの企業のサイトで紹介してもらわなければならない。経済的支援を求めてはならず、学生たちの活動に協力していることを広報することもできるので、協力してもらえる可能性は十分にある。とはいえ、実際にどれだけの数の企業が協力してくれるのかは、ふたを開けてみないとわからない。まだまだ、学生たちの努力が必要である。200社を目処に、学生たちは文書を郵送して協力を要請する計画である。文書だけでは自分たちの熱意を十分には伝えられないので、学生たちはプレゼンの動画の制作を進めている。協力を要請する動画を自分たちのウェブページにアップロードして、その動画を見てもらい、文書と合わせて自分たちの熱意を届けようとしている。これだけのことを、仲間との協働を通

して考え出し、実行に移すことができる学生たちは、上述のとおり、どこの社会に出しても恥ずかしくない立派な人材として成長している。これだけの人材を育てることができた GC 学科の教育内容を誇り思うと同時に、改めて学科の先生方のご指導に敬意を表したい。現在の立派な教育が実現できているのは、ひとえに、これまでに GC 学科の教育に尽力して下さった先生方のおかげである。

学生たちの絵本プロジェクトは、どうやら年度末の正式な授業終了までに終わりそうにない。年明けから、200社を目処に協力を要請する文書を送る。さらに、絵本に音声をつけることも実行したいはずである。担当教員としては、協力を呼びかける企業や、実際に絵本を見た子育て世代の人々から、出版の要望が出るのではないかと、身勝手ながら期待している。授業が終わってからのプロジェクトは、大学の方針に縛られることなく、完全に学生たちだけで進められる。それだけ、自分たちで責任も背負うことになるものの、自分たちの力で成果をさらに育てていく醍醐味は、是非とも学生たちに味わってほしい。学生たちが、自分たち自身の力で絵本プロジェクトを成長させることを願ってやまない。

<https://www.at-s.com/news/article/shizuoka/1166026.html>



富葉大生 育児支援で絵本制作 ネット公開、リンク掲載呼びかけ

記者 山口 真

豊橋大外国語学部(静岡市駿河区)の学生が子育て世代を支援しようと、絵本『みかんちゃんのねいり』を制作し、インターネット上で無料公開を始めた。子どもたちに『多摩川とは何か』を説き、物置が壊す指干とも仲良くするべきと伝える内容。多くの人に読んでもらおうと、企業にホームページへのリンクの掲載呼びかけしている。



『制作のきっかけは社会問題を考える大学の講義だった。受験生の人は受験を多少子化に投じ、子育てをする親が経済面や情報面で負担を感じることが子化の一因と考えた。「子育ての問題を楽しくできれば負担軽減につながるのでは」との思いで、6月から制作作業を始めた。

絵本では主人公のみかんちゃんが玩具の倉庫屋に入ってもらおうとするが、「真は貯蓄じゃない」と指摘されに断られる。それで毎日録音ハーモニカを練習する姿に田舎は心を打たれ、報酬に決める。

絵本のPRのため、学生はみかんちゃんの薬酒にちなんで録音ハーモニカを製造する株式会社製作所(海松市中央区)に依頼、「図らずも電話話で企画の裏面を伝えた。株式会社専務は『学生の奮闘な考え方が伝わった』とし、会社のホームページにリンクを掲載した。

今後は他の県内企業にも協力を依頼する。3年の内訳生橋さんは『多くの子育て世代に届けられるよう呼びかけたい』と意気込む。

絵本は専用サイト<<https://mikankyoda01.com/todokoruneitoproject>>で閲覧できる。

4. 臨地実習

臨地実習の概要

グローバルコミュニケーション学科

グローバルコミュニケーション学科は、2018年度以降の入学生を対象とするカリキュラムを改訂するに伴い、2018年4月に「臨地実習A・B・C」という新たな科目を3つ開設した。「臨地実習」の3科目はいずれも、学生たちが主体的かつ積極的に学外での行事に参加し、目標や課題を自覚するという機会に位置付けている。まさにグローバルコミュニケーション学科での学びを統合的に運用する場である。

(1) 臨地実習 A

担当者：増井実子

時間：2022年10月～2023年1月

場所：焼津市さかなセンターおよび常葉大学草薙キャンパス

参加者数：8名

内容：11月27日に開催される「はあとふる Yaizu 2022」において、来場する外国籍住民の方々と直接対話をする機会を持つために「インタビュー」活動を行う。昨年の臨地実習A受講生が作成した「転入外国籍住民向けのゴミ分別動画」の概要を会場でポスター発表する。ボランティアスタッフ(司会、案内など)として、会場の運営を支える。本誌「GC学内外での教職員や学生の取り組み」に所収の概要や体験記を参照してほしい。

(2) 臨地実習 B

担当者：清ルミ

時間：2022年6月1日(水)～8月31日(水)

場所：箱根高原ホテル

参加者数：27名

内容：箱根高原ホテルのビジネスプランと広報ビデオを作成する。詳細は実習B

の概観と体験談を参照してほしい。

(3) 臨地実習 C

担当者：戸田裕司

時間：(中止)

場所：中国福建省漳州市

参加者数：なし

内容：閩南師範大学日本語学科において授業や課外活動へ参与する。2022 年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延のために、中止した。

2022 年度 臨地実習 A

「はあとふる Yaizu における多文化共生推進活動」

増井 実子

今年度の「臨地実習 A」は、受講者 7 名が 11 月 27 日に 3 年ぶりに実施された「はあとふる Yaizu」において以下の活動を行なった。

●活動内容

①外国籍住民へのインタビュー活動

- ・「インタビュー」という形式を取りながら、外国籍住民の方々と直接対話をする機会を持つ。
- ・取材した内容をもとに、外国籍住民の方々の日本に対する印象や生活面で困っていることをまとめることで、地域の多文化共生に関して考える機会を持つ。

②外国籍住民へのゴミ分別啓発活動

- ・昨年の臨地実習 A 受講者が作成した「転入外国籍住民向けのゴミ分別動画」の概要を会場でポスター発表することで、ゴミ分別が難しくないことを伝える。

③当日の会場運営補助

- ・ボランティアスタッフ（司会、案内など）として、会場の運営を支える。

IV. 4. 臨地実習

●活動日程

10月：活動の説明会

10月～11月：インタビュー班とゴミ分別啓発班に分かれて、週1回のペースで準備を進める。

11月後半：焼津市市民協働課とオンライン打ち合わせ（zoom）

11月27日：「はあとふる Yaizu」での活動

12月：活動の振り返り、報告会に向けた準備

1月18日：GC学科「海外・学外活動報告会」での報告

1月末：最終レポート提出。

●受講者氏名

2年 安間友奏 鈴木桜子 堤彩華

1年 青木めぐな 池村 祐希 大木 萌々華 落合優音

●「振り返り活動」で受講者から出た意見や感想

- ・積極的に自分から関わりを持つとすることが大事。そうしないとお互いの理解が深まらない。
- ・インタビューした中に差別に悲しむ人がいた。対話をする機会が必要。
- ・多国籍の人たちにインタビューするためには、挨拶だけでも事前に覚えておいで使ってみると、相手の気持ちがほぐれる。
- ・私たちがインタビューしようとする警戒する人もいた。友好的な姿勢を示して相手の緊張をほぐすスキルが必要だと感じた。おそらく自分が何者なのかを相手に伝える「自己開示」と「笑顔」が大事なのではないか。
- ・インタビューで相手の国の文化を知る機会にはなったが、知識不足で会話を掘り下げることができなかった。事前準備が必要だと感じた。
- ・日本人と交流する機会が少ないので、こういうインタビューは貴重だと言われた。日本人からの視線が冷たく、生きづらさを感じることもあるそう。関わり合いを持つ仕組みづくりが大切。
- ・学校ではなく生活の中で日本語を学んだと言われた。日本語教員養成課程があるGC学科だからこそ、学生が役に立てる機会があるのでは。

- ・相手がどう接してもらえたら嬉しいのか、悩んで緊張した。接触の経験を増やすことが大事。
- ・「はあとふる Yaizu」というイベントを知らなかった。もっと参加してほしいので、どうやったら認知度が上がるのかを考える。
- ・焼津以外で実施している国際交流イベントも調べて参加する。
- ・外国人の方と世間話ができなかった。「国籍」を度外視して「一人の人間」として接していきたい。
- ・どういう交流だったら参加しやすいのか、相手の希望を聞ければよかった。
- ・相手のレベルに合わせた「やさしい日本語」の力を身に付けたい。



司会進行を務める鈴木さん (2年)



モンゴル人の方へのインタビュー



GC学科ボランティア学生集合写真



外国籍住民へのゴミ分別啓発活動ブース

追記：2021年度の臨地実習Aにおいて英語・日本語で作成した「転入外国籍住民向けのゴミ分別動画」は、2022年度に英米語・GC学科の学生による別プロジェクトとして、タガログ語・ポルトガル語への翻訳も行なった。

(担当教員：江口佳子、良知恵美子、増井実子)

臨地実習 B の概観

清 ルミ

2022年度の臨地実習は、近畿日本ツーリスト沼津支店長・玉田勝司氏の協力を得て、5月下旬から8月下旬までの期間に行われた。

実習内容は、オンラインでの事前学習、近畿日本ツーリスト沼津支店におけるインターンシップ、箱根高原ホテルでの1泊2日の臨地研修とフィールドワーク、グループワークによる「箱根高原ホテルのプロモーションビデオ」製作と本成果物の発表であった。

ゴールデンウィーク明けに説明会を開き、参加者は27名となった。箱根までは各々がフリーパスを利用して現地集合することにより、箱根を観光する顧客の心理を擬似体験から考察してもらった。

実習を経て参加者が製作したビデオは、個性的で力作ぞろいであり、短期間にもかかわらず協働して取り組んだ成果がみとれるものであった。実習結果報告は、参加代表者2名により、1年次必修科目「人間力セミナー」合同クラスで実施された。実習成果物である「箱根高原ホテルのプロモーションビデオ」のみならず、口頭発表におけるパワーポイントも緻密で説得力があり、同学年から「感動した。自分も体験してみたくなった」というコメントが多数寄せられた。

5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

2022年度の1年生「人間力セミナー」の授業では、読書の有用性を体験してもらうために「悩みを解決する手がかりを読書で得よう」という活動を行った。具体的には、ゼミ生が今気になっていること（悩み・課題・やりたいことなど）をマインドマップで図示化しながら自覚し、その後解決のヒントになる本を複数冊図書館で借り出して読書レポートを書く、というものである。今回はゼミ生が選書をしやすいようにテーマを「悩み」としたが、これを「問題関心」に置き換えれば、今後の専門課程で研究レポートを執筆する際にも応用できる。読書の有用性を感じたというレポートが多かったが、今回はその中から1編を紹介する。 (増井 実子)

田舎娘は、キャリアウーマンに憧れる

22122059 湊 佑紀奈

私は将来、韓国語を活かせる仕事に就きたいと考えている。それを実現するために、私は今自分に合った働き方や職業、有効な時間の使い方について知る必要がある。

なぜ、そのように考えるのか。韓国語を活かせる職業として私が今考えているのは、翻訳家や通訳、外交官と複数ある。実のところ、それらの職業にどのような資格・スキルが必要なのか、どのような労働環境なのか、詳細な知識がなく、自分に合った働き方ができる職業がわからないでいる。

また、肝心の韓国語のスキルが伸び悩んでいることにも問題がある。高校生までは時間に余裕もあり、独学でも勉強する時間があった。しかし、大学生になって課題の量が多く、余暇学習の時間が減ってしまい、私の韓国語は完全スランプ足踏み状態である。これらの現状から、自分にとって理想的な働き方と、将来に向けて力を付けるための時間を見つける必要があると感じた。

解決の糸口を求め、図書館で3冊の本を借りた。A：PHP 研究所編、『好きから見つけるなりたい職業ガイドブック』、PHP 研究所、2005年、B：アシュリー・

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

ウィランズ、『TIME SMART お金と時間の科学』、東洋経済新報社、2021年、C；日本経済新聞生活情報部編、『できれば幸せに働きたい』、日本経済新聞社、2003年である。(以下、各書をA・B・Cと略記する)

それでは、各書でどのように述べられているかを紹介する。

Aの本では、「好きこそもの上手なれ」を念頭に、好きな事を仕事にするために必要な資格やスキルを紹介している。本書において最も参考になった箇所は、47ページの翻訳家に必要なスキル「話し言葉を訳す通訳と違って、文章を訳す翻訳家では、さらに日本語のセンスが重要なポイントになる。」という部分である。外国語を使う仕事に就くためには、外国語だけを徹底的に磨くべきだと考えていた自分の未熟さに気づかされた為、最も参考になったと感じた。

次にBに移る。Bの著者は、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学にて社会心理学博士号を取得。現在は、ハーバードビジネススクールで人間とお金の関わりや、社会行動における幸福度や充実感にまつわる研究を行っている。Bの書において最も参考になった箇所は、92ページの「時間に投資する余裕がないと思ひ込まない」という項目である。この項目では、通勤方法を歩きから自転車に変えたり、高価なコーヒーマカを買うことで朝の支度時間に余裕を持たせたりと、お金を使うことで時間を作ることを勧めている。学生のうちはお金の力に頼ることは難しいように感じた。しかし、時間に投資するための余裕はお金だけを指す訳ではないのではないか。私は、神経質で完璧主義な性格な為、課題や発表にこだわり過ぎてしまう節がある。そういった部分を、班のメンバーに頼ったり、少しずる賢いやり方をしてみたりすることで余裕を持たせてみるのも良いのではないかと気づくことができた。最後にCについて紹介する。

Cの書は、日本経済新聞生活情報部による編集で、働く女性の現状課題とその向き合い方について、様々な角度から切り込んでいる。Cの書において最も参考になった箇所は、200ページの「仕事とプライベートのバランスがとりやすいこと」という部分だ。私は、都市部の大きな企業でキャリアウーマンよろしく働きたいという考えがあるが、反対にゆったりしたペースで働きたいという考えもある。Cの書を読み、地方企業の金銭的にも時間的にも余裕のある環境で、ワークライフバランスを重視しながら働くという方向に気持ちが傾いた。

それぞれの本の共通点としては、A・Bの本では、自分の好きな事・得意な事

や満足度を重要視して将来設計をすることを勧めているという部分が共通していた。相違点は、A・Bの本で共通して理想的なキャリア設計が描かれていたのに対し、Cの本ではその理想が思うように実現できないケースが多いという現実が描かれていた。

今回の読書を通じて得られた知見は、外国語を活かす職業に就くためには日本語のスキルも上げておく必要があるということ、さらに、その時間を作るためには「些細な余裕」を作っていくことが大切だと解った。それでもなお、越えられない課題の存在も今回の読書を通じて知ることが出来た為、その解決法を模索していく事が、今後の新たな課題になると感じた。

最後に、読書を通して悩みを解決するという事に関して、私は思いもよらない発見に導いてくれる面白いメソッドだと感じた。初めは、自分の疑問に関するピンポイントな内容の本が見つからず億劫に感じた。ところが、いろんな方向に脱線するからこそ想像もしなかったようなヒントが転がっていることもあり、非常に興味深い取り組みだった。

2022 年度後期「人間力セミナー」（担当：若松大祐）では、授業の前半で瀧口夕美『民族衣装を着なかったアイヌ——北の女たちから伝えられたこと』を講読した。著者は「アイヌとは何か」という問いに答えようと試みる。そして、一般に教科書などに登場する民族衣装を着たアイヌだけでなく、現代日本で日本人と同じように普通に生活するアイヌにこそ目を向ける。『とこはことのは』36号に収録するのは、小泉杏果さん（GC 学科 1 年生）による読後感である。（若松大祐）

人は分類したが

小泉 杏果

はじめに

1. 『民族衣装を着なかったアイヌ』の書誌情報
2. 『民族衣装を着なかったアイヌ』の内容
3. 『民族衣装を着なかったアイヌ』を読んで—人は分類したが—

はじめに

本稿は『民族衣装を着なかったアイヌ——北の女たちから伝えられたこと』の内容を踏まえ、人の分類は絶対的でなく、分類する側の価値観によるため相対的であると結ぶ。

1. 『民族衣装を着なかったアイヌ』の書誌情報

テキスト：瀧口夕美『民族衣装を着なかったアイヌ——北の女たちから伝えられたこと』京都：編集グループ SURE、2013。

要旨：著者である瀧口夕美が、観光地・阿寒湖畔で育つ間に、幾度もアイヌについて問われ疑問を抱いた。そして瀧口は、アイヌをはじめとした日本の北方の民族に纏わる人を訪ね、自身の答えを探していく。

構成：本書は全 222 ページあり、4つの章とまえがき、あとがき、解説からなる。

著者：瀧口夕美、編集者。1971 年、北海道、阿寒湖畔のアイヌ・コタンに生まれる。母・ユリ子は十勝出身のアイヌで、父・政満は満州生まれの和人である。

目次：まえがき 「今はもう日本人と同じなんでしょう？」 (p.7)

第 1 章 どうしてここにいるの？ — 母・瀧口ユリ子のこと (p.17)

オジジのトゥイタクを聞くまで (p.19)

北海道旧土人保護法 — 私の祖先の場合 (p.35)

「同化政策」というけれど (p.63)

牛のおじさん (p.70)

見ることと、見られること — おみやげと観光 (p.83)

第 2 章 故郷ではない土地で — ウイルタ・北川アイ子さんのこと (p.97)

オタスで暮らしたころ (p.99)

私は自分をウイルタでも日本人でもなくした (p.118)

ソ連時代の暮らし (p.127)

引き揚げる (p.137)

第 3 章 鏡のむこうがわへ — サハリンの女たち (p.151)

海を渡る (p.153)

国境があった場所で (p.165)

第 4 章 鉄砲撃ちの妻 — 長根喜代野さんのこと (p.177)

アイヌ、自分との距離 (p.179)

狩猟と夫婦げんか (p.187)

お風呂でのトゥイタク (p.198)

あとがき 私たちの歴史 (p.207)

解 説 「違う」と「同じ」のあわいをたどる (p.215)

2. 『民族衣装を着なかったアイヌ』の内容

『民族衣装を着なかったアイヌ』は著者の瀧口夕美が、自身の過去を振り返り、周囲の人々から瀧口自身のルーツであるアイヌについてあれこれ問われ、自分は

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

何者なのかと疑問を抱くシーンから始まる。そして瀧口は、アイヌを始めとした日本の北方の民族に纏わる人々を訪ね、特に「北の女たちから伝えられたこと」を、4章に渡って述べていく。

まえがき「今はもう日本人と同じなんでしょう？」(pp.7-15)

瀧口は色々な場面でアイヌについて質問されてきた。それにより、自分とは果たして何者なのか、純粋なアイヌは存在するのか。このようなアイヌに関する疑問を抱え、アイヌと自分との距離がはかれなくなってしまった。そこで、瀧口は日本の北方の民族に纏わる人々の体験を踏まえて、アイヌとは何かを考えていく。

第一章 どうしてここにいるの？ — 母・瀧口ユリ子のこと (pp.17-95)

第一章では、まず第一節において、著者(瀧口夕美)の母である瀧口ユリ子の体験を振り返り、母自身のアイヌに対する考え方を綴る(p.23)。続く第二節以降において、瀧口夕美の親戚や祖先である長濱伊蔵、長濱清蔵、長濱平夫といった人々の体験から、明治時代以来のアイヌの生活を紐解いていく(p.28)。

第一章第五節で、本書の「まえがき」で触れた観光問題に話題が及ぶ。瀧口は、井上美奈子が茅辺かのう名義で執筆した『階級を選びなおす』(1970)という書籍を取り上げる(p.89)。同書によると、阿寒湖畔のアイヌの人々に向けられる好奇心は、「その対象が自然の風景などでなく、人間であることを考える時、商品の売買、客と商人というだけでは割り切れる部分が残ります。(…中略…)それは自分にとっての手段であるべきところへ自分そのものを置いているからです」。観光によって、人間は自分を「手段たることに甘んじることを習慣化させてしまう」。本来は「生活の主体であるべき自分は欠落したままであり、しかもそのことに気づくことも出来なくなる」(p.92)。井上美奈子の指摘を踏まえ、瀧口は整理がつかない問題を、手放さずに抱え続け、考え続けることでしか解決できないと考える(p.93)。

第二章 故郷ではない土地で — ウイルタ・北川アイ子さんのこと (pp.97-150)

第二章は、北川アイ子の樺太での生活やウイルタの処遇について綴る。日本が樺太を領有していたころ、樺太庁は先住民政策の一貫として、アイヌ子弟を対象

にして土人教育所を設けた (p.108)。そこでは、日本人教師が北方民族の子女に対し、日本人になれと教えていた。しかし、1945年に日本は敗戦し、8月17日に教師は、ソ連が樺太を接收する際に自分たち日本人だけが内地に引き揚げ、北方民族は樺太に残るように告げた。これを機にアイ子は、自分が「日本人でもないしい、ウイルトでもないことにした」という (p.125)。

アイ子のいとこであるゲンダヌ (北川源太郎) は、アイ子の家の養子となり、アイ子の兄になった。日本の兵士としてオタスという集落からかり出され、戦後はシベリアに留意された後、日本に「引き揚げ」た (p.119)。1975年にゲンダヌが日本政府に対し旧日本軍人への恩給の支給を自らに求め、ウイルトとしての活動を始めると、それを支えるためにアイ子は、自分がもう一度ウイルトになることを選んだのだった (pp.147-148)。

第三章 鏡のむこうがわへ — サハリンの女たち (pp.151-176)

第三章は、サハリン (樺太) への旅で、瀧口が出会った人々について綴る。本章前半に登場するのは、金玉順 (キム・オンスク) である。彼女はユジノサハリンスク (豊原) の旅行会社に登録し、時々通訳の仕事をしている (p.158)。瀧口は「金さんに会ってから、私は自分がどこにいるのかわからなくなりはじめていた」(p.160)。金玉順は北朝鮮の咸興に生まれ、2歳の時に樺太へ移住する (p.159)。一生サハリンに住むとは思わず、いつも引上げの準備をしていた。その為、サハリンに住む為に必須である正式なロシア語を学ばず、大切な月日を無為にした、と振り返る (p.163)。しかし、金玉順はサハリンで日本、ソ連、ロシアという3つの時代を生き抜いた。そして朝鮮、日本、ロシアという3つの国を愛し、朝鮮語、日本語、ロシア語という3つの言葉を話す。そして、「サハリンほど好い所はないと、今の所は思っ暮らしている」 (p.164)。

本章後半では、ポロナイスク (敷香) で金山秀子に出会い、彼女と過ごした日々を描く (p.165)。また、後に金山秀子が日本サハリン同胞協会の事業の一環として、日本に一時帰国した際の情景を綴る (p.173)。

第四章 鉄砲撃ちの妻 — 長根喜代野さんのこと (pp.177-206)

第四章は、長根源次郎、喜代野夫妻に聞いた話を綴る。日本史の教科書で登場

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

するアイヌは、アイヌ文様の着物を着て、狩猟採集の生活をして、茅葺の家に住む。「そういう姿でなければ、アイヌではないかのように」。しかし、アイヌは滅んだのではなく、生活スタイルを変えながら今に至ったのである。長根夫妻は、日本化した暮らしの中で、アイヌとして生きていた先輩である (p.180)。

「アイヌとは何か」という疑問は、喜代野も瀧口と同じく、自分で突き当たる前に、他人からはやしたてられたりして生じてしまった (p.200-204)。しかし喜代野は、小学校の時に研究者が来校して、研究の為に骨格を測られた。ここで偉い先生に「アイヌは欧州系白人種だから、恥ずかしいことではない」と言われる。それを受け、彼女はアイヌである自身に自信を持ち、北海道人とは違うのだと思ったという (p.201)。

あとがき 私たちの歴史 (pp.207-213)

本書は2000年から2006年のインタビューが基になっている (p.207)。「差別があった、抑圧があった、それに対してアイヌは闘ってきた」。それはいわば外向きの語りである。アイヌは、「少数民族というカテゴリーで見れば、被抑圧者という受け身の存在かもしれないが、誰にでも生活者としての主体的なものの見方もある。そういう多重性のもとで、個人の歴史というのは紡がれている」 (p.208)。

解説 「違う」と「同じ」のあわいをたどる 山田伸一 (pp.215-222)

山田伸一も勤務先である北海道開拓記念館で、瀧口と同じように、来館者からアイヌについての質問を受けることがある。質問者の多くは、「違う」という言葉に接すると、服装や言語がアイヌと日本人の間で違うことを期待してしまい、「同じ」という言葉に接すると、アイヌがいまやすっかり日本人だと思ってしまう。両極端のどちらかではなく、「違う」と「同じ」のどちらの面も抱えているのが、現在のアイヌの姿である。しかし、そこが伝わらない。違うと同じが入り混じる「あわい」について、『民族衣装を着なかったアイヌ — 北の女たちから伝えられたこと』は表現しているのである (p.216)。

3. 『民族衣装を着なかったアイヌ』を読んで一人は分類したがー

瀧口夕美『民族衣装を着なかったアイヌ』は総じて、人間の持つ「あわい」部分を描く。現在のアイヌは日本人との間に「異なる面」と「同じ面」を持ちあわせ、もはやその人がアイヌであるとか日本人であるとか、そういうふうに一括りにはできない。瀧口は様々な人から訪ね、時間をかけて「あわい」をたどっている。また、本書は差別や抑圧と闘ってきた少数民族としての視点と、生活者個人としての視点を導入して、アイヌを重層的に論じている。

本書では、瀧口が「あなたは～ですか」と尋ねられ困窮してきた場面が、たびたび描かれる。瀧口はそうした体験の積み重ねから、アイヌとはなにか、そもそも自分は何者なのかと考えはじめた。しかし実のところ、私達誰でもこうした疑問にすぐさま回答できないのではないだろうか。

例えば「あなたはお母さんですか」と問われたとしよう。ひと昔前ならば「はいそうです。」と大多数の子供を持つ女性は答えたかもしれない。しかしよく考えてみると、現在においてその人自身の置かれた状況は一つではない。例えば会社員、かつ部署のリーダーでもあり、また趣味の活動において先生、もしくは生徒でもあったりというように、一人の人間を単純に分類して「～です。」と言い切れない、もしくは言い切りたくない状況である。なぜなら様々な属性全てが自分自身であり、この各々の役割や立場そのものが合わさって、「私自身」なるものが確立されているからである。

人間が「あわい」を抱え持つのは、自分自身だけでなく、他者においても同様である。こう考えるならば、自身に対して、また他人に対して、何らかのレッテルを貼り付けて理解した気になるべきではないだろう。自分の価値観にとらわれず、互いの立場を想像し理解し合える関係が理想である。そもそも分類なんてナンセンスなのである。

歓迎聆聴：2022 年度公開講演を実施して

若松 大祐

2022 年度は、自身の授業の一環として合計 3 回の公開講演を実施しました。(ここでは、『とこはことのは』35 号に未掲載の 2021 年度の講演も併せて掲載します。) いずれの講演も、授業担当者である若松の不足を補って余る内容でした。講演終了後にアンケートを取ったところ、受講者は講演を通じて新たな知識を得たり、物事について考えるきっかけを得たようです。

講演は公開しており、本来の授業の受講者のみならず、他の学生や教職員の参加がありました。とはいえ、授業の受講者以外の参加者はまだまだ数なく、残念です。2023 年度も引き続き公開講演を実施しますので、この記事を読んだあなたもお越しになりませんか！

なお、ゲストスピーカーを招聘するにあたり、常葉大学教材費の支援を受けました。改めてお礼申し上げます。

< 公開講演の一覧 >

ほとんどが約 60 分の講演、約 20 分の質疑応答です。

(1) 2021 年 11 月 18 日 (木) 13:15-14:45、教室 A301 (授業名：中国語会話 IB)

佐藤文香 (SATO, Ayaka)、鈴与自動車運送総務部総務・人事チーム

「虚学を学ぶ意義」

本講演では、参加者とともに虚学を学ぶ意義について考えます。常葉大学の学内外での諸活動は必ずしも就職に直結するものばかりでなく、むしろ直結しないものが多いでしょう。そうした就職に直結しない活動への参加が、実は就職活動、さらには就職後の社会人生活につながっていることを指摘します。なお、講師は本学外国語学部の卒業生です。

(2) 2021 年 11 月 17 日 (水) 13:15-14:45、教室 B501 (授業名：人間力セミナー)

杉山昌弘 (SUGIYAMA, Masahiro)、杉山農園・代表/安倍山葵業組合・副組合長

「わさびの栽培と梅ヶ島の文化」

本講演は、次の 3 点に話題が及びます。(1) 梅ヶ島の文化や歴史 (温泉、金山、神楽など)、(2) わさび栽培という仕事、(3) 安倍山葵業組合 (さらには静岡県山葵組合連合会や静岡わさび農業遺産推進協議会) の展開する内外との交流活動。なお、本講演は、「人間力セミナー」(清ルミ) と合同で実施しました。

(3) 2022 年 7 月 7 日 (木) 10:45-12:15、教室 A209 (授業名: 中国語会話 IA)

藤本左京 (FUJIMOTO, Sakyō)、左京商事株式会社・代表取締役

「今こそ外国語を学ぼう」

本講演は、外国語の習得が世界で活躍するための重要な手段になることを説くものです。講師の藤本左京氏は中国四川省から来日し、日本へ帰化した経験を持ちます。中華料理四川京の社長でもあります。まずは経歴を紹介し、次に静岡で展開する事業 (食品の輸入販売) を概説し、最後に静岡の学生へメッセージを伝えます。

なお、講演はすべて中国語で行われ、若松が日本語へ通訳しました。冒頭に外国語学部長 (戸田裕司) より「致詞」(あいさつ) があり、質疑応答では中国語で質問する学生もありました。

(4) 2022 年 9 月 22 日 (木) 10:45-12:15、教室 A520 (授業名: 中国語会話 IB)

葉毅均 (YEH, Yi-chun)、(台湾) 国家図書館漢学研究中心・編輯

「臺灣的漢學國際交流與生活經驗分享」

(台湾における漢学の国際交流と日常生活の紹介)

本講演は、台湾における文化の一端を紹介するものであり、内容は大きく二つに分かれます。まず、漢学 (Sinology) に即して国家図書館漢学研究センターの展開する国際学術交流の概況を紹介します。続いて、外国と比較しながら、台湾の飲食文化の特徴について言及します。講師には、『走向馬克思主義史學之路——范文瀾前傳』(台北: 三民書局、2020 年) があります。なお、講演は中国語で行われ、若松が日本語へ通訳します。また、講師と若松が Microsoft Teams を使い、台北の国家図書館漢学研究センターの会議室と静岡の草薙キャンパスの教室を中継します。

IV. 5. (GC) 学内外での教職員や学生の取り組み

(5) 2022年9月22日(木)10:45-12:15、教室 B503 (授業名: 中国語会話入門)

横井香織 (YOKOI, Kaori)、静岡県立大学グローバル地域センター・特任准教授

「中国で暮らす・学ぶ・教える～青島・寧波での体験から～」

本講演は、まず講師の経験に基づきながら中国の青島や寧波という都市の概況を踏まえ、次に昨今の中国における大学生の生活を紹介します。最後に、中国で日本語を教えるという仕事について、その意義を述べます。講師の主要著作には、『帝国日本のアジア認識—統治下台湾における調査と人材育成』（岩田書院、2018年）があります。なお、本講演は、「中国語会話入門」（戸田裕司）と合同で実施します。

ポルトガル語での読み聞かせ

20122008 植松 マユミ

2022年10月、多言語読み聞かせプロジェクトが開始した。焼津図書館100周年記念事業の一環として、このプロジェクトに常葉大学が参加することになったのだ。夏休み前の7月頃、私は江口先生から「こんなプロジェクトがあるんだけど、ポルトガル語を担当してくれない？」と声をかけて頂き、参加することが決まった。ポルトガル語の他に英語・日本語での読み聞かせも行った。読み聞かせの間、子供たちが飽きないように、ポルトガル語、英語、日本語バージョンの『頭・肩・膝ぼん』も一緒に歌った。小道具なども用意し、1時間という時間を子供たちが楽しんでくれるよう努めた。毎週のミーティングや個別での話し合いも必須事項だった。当初は約一ヶ月半の準備期間を長いように思えたのだが、こうしてプロジェクトはあっという間に過ぎた。

多言語で読み聞かせを行うことで、多文化共生を子供たちにも体験してもらうことが趣旨の一つであった。しかし、予約者は日本人親子二組のみで、これに追い打ちをかけるように、その内の一組は当日体調不良で欠席となった。正直に述べると、「あんなに時間をかけて準備したのに、日本語も曖昧な年齢の子供にポルトガル語を読み聞かせるのか」と気持ちが落ち込んだ。また、ポルトガル語での読み聞かせは初めてであり、自信もなかったため、ブラジル人がいなくて良かっ

たと安堵もしてしまった。ところが、開始時間直前に、日本人親子に加えてブラジル人親子も現れた。突然、私はネイティブの前で本を読む緊張に襲われた。実際のところ、私もネイティブと言えばネイティブなのだが、間違っただけを使ったり、使いなれていない単語では突っかかってしまったりする。そのため、家の外でポルトガル語を使うと緊張してしまうのである。

そんな私の不安が自信に変わった瞬間があった。それは、ポルトガル語で読み聞かせを始めたとき、ブラジル人の男の子が目を丸くし、驚きながらも嬉しそうにしてくれたからだ。私はそんな彼を見て、聞き慣れた言語であっても、いつもとは違う環境で聞いたことに思わず嬉しくなり、不思議な想いを抱いたのかもかもしれないと考えた。彼のような子供でも分かるくらい、様々なルーツを持つ人は内と外の世界が、内＝母語、外＝日本語という風にはっきり分かれているのだと改めて感じた。今回のような活動を通して、その内と外の狭間にある壁を崩すことが多文化共生に繋がると確信した。この点では、読み聞かせのプロジェクトは成功したと自負している。一人の男の子の素直な反応に、その根拠を明らかに見出したからである。

ポルトガル語が完璧でなくても、ブラジル人と日本人の架け橋になれることを実感したプロジェクトだった。今後はこのことをもっと自分の強みにして、自分の周りの多文化共生に努めていきたいと強く思う。実際、この活動に参加したおかげで、バイト先ではブラジル人にポルトガル語で接客したり、一緒に働いている日本人に優しい日本語での接客について教えたりと、自分にできることを行動に移すという挑戦ができています。そして、これからも自信をもってこの挑戦を続けていきたい。

V 各言語圏での活動

1. スペイン語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

2022 年度のスペイン語圏関連の活動報告

増井 実子

(1) ショート留学、語学研修

新型コロナウイルス感染拡大によって 2020 年度から外国語学部の海外プログラムは中止されていたが、2022 年度は感染対策に留意しつつ再開された。スペインについては、提携先のアリカンテ大学において以下のプログラムが実際される。

- ショート留学 1 名 (2 年生) 2023 年 2 月～3 月 (2 ヶ月間)
- 語学研修 7 名 (4 年生 4 名、3 年生 2 名、2 年生 1 名) 2023 年 2 月 (1 ヶ月間)

参加学生に対して、スペイン人教員や担当旅行会社による安全指導やガイダンスを実施した。帰国した学生たちの報告は次号で掲載予定である。



ショート留学認証式



スペイン人教員による安全講座



担当旅行会社による事前ガイダンス

(2) セビーリャの「東アジア研究センター」で日本語を学ぶ学生とのオンライン・インテルカンビオ（交流授業）

- ・日時：2022年11月19日（土）20:00-22:00
- ・参加校：東アジア研究センター（Centro de Estudios de Asia Oriental）スペイン・セビーリャ／常葉大学、神奈川大学
- ・常葉大学の参加者数：グローバルコミュニケーション学科12名
- ・形式：zoom 使用し、スペイン人と日本人学生の混合チームで交流した。
- ・交流内容：挨拶、自己紹介、スペイン語の早口言葉、お互いの国の文化で好きなところをスペイン語・日本語で話し合う。



交流の様子（zoom 画面）

次頁では、参加した学生の参加記を掲載する。

インテルカンビオで得た気づき

21122052 間嶋 柚月

私は11月19日の日西オンライン・インテルカンビオに参加した。参加理由は、今までの勉強がどれほど身についているか確認したかったからだ。当日までに私は、スペイン学生と話す内容を考え、使えそうな単語やフレーズを書き出していた。その中に、分からない文法はなく、あったとしてもすぐ理解できた。勉強が身についている実感を得て、準備は万全だと考えていた。

しかし、インテルカンビオに参加すると、それまでの考えは誤りであることと、自分の実力不足を痛感した。まず、交流会の流れが理解できなかった。今回の交流会は、各班で会話をすることを主体としていたため、アイスブレイク後は班ごとで流れが異なった。私の班ではスペイン語を主に使用していたため、今何について話しているか分からない時があった。また、用意していた話題と別のものになると会話について行けなかった。会話していれば当然様々な話題があがるため、多くの語彙が必要となる。私は基本レベルと準備していたジャンルの語彙しか身につけていなかった。ここで、私には十分な語彙がないことに気づいた。

この交流会では、他学校からも参加者を集っており、日本人スペイン語学習者と接触できる場でもあった。そこで1年勉強している学生と同じ班になったのだが、同じ期間勉強している私と彼女との間に差があった。彼女は冗談を交えながらスペイン学生と談笑していた。それはスペイン人の音声変化を正確に聞き取り、即座に返答できる思考力があるから成せることであり、現在の私には到底できないことだった。

この出来事から、私は上記にある自分の弱みに気がつくことだけでなく、現在の実力を把握することもできた。語彙は足りなかったが、なんとなく推測できたため、用意していた単語で会話を試みた。そのため、何個か質問に答えられ、言いたいことを説明できた。今回インテルカンビオに参加し、自分の実力を確かめられた。また機会があれば参加したい。

2. ポルトガル語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

2022 年度のポルトガル語関連の所感

江口 佳子

新型コロナウイルスの影響が続いた一年であったが、対面授業を通年で実施することができた。国際社会では、2月のロシアの侵攻により始まったウクライナ戦争が終わりの兆しを見せず、日本国内でも安倍元首相の銃撃事件もあり、サッカー・ワールドカップでの日本代表チームの活躍が世間を盛り上げたものの、総じて社会には重い雰囲気が漂う一年であったように思われる。しかしながら、こうした状況下ではあっても、学生たちは意欲的に学習に取り組み、学内外での活動も活発に取り組んでくれた。

担当する「スペイン/ラテンアメリカの文化」の授業は、ラテンアメリカの社会的特徴といえる「人の移動」をテーマとしている。第13回(7月)の授業には、現下の国際情勢を踏まえ、ヨーロッパ・アジア言語文化研究所の小川万海子上級研究員にお越しいただいた。小川氏はポーランド絵画を専門とされ、著書に『ウクライナ 19世紀ポーランドの芸術家たちを魅了した豊饒と憂愁の大地』(2011年)がある。授業では、外交官として勤務されたポーランドでの経験や、近隣国からの支配に翻弄されたポーランドの歴史、民族意識の形成に貢献したポーランド人画家、さらに、ウクライナとポーランドの関係について、絵画の視点から講話していただいた。講義への感想は、履修者を代表して清水理那さんが執筆した。

今年度は、ポルトガル語の長期留学生として初めて、村田圭花さんが協定校のリスボン大学ポルトガル言語文化センター (ICLP: Instituto de Cultura e Língua Portuguesa) で半年間の留学をすることになり、8月に出発した。村田さんは2年次にポルトガル語のオンラインコースを受講し、3年次には「全国学生ポルトガル語弁論大会」にも出場した。また、日本語教師養成課程を履修して、地域の日本語教育のボランティア活動にも携わり、GC学科のカリキュラムである「二言語学習」では中国語を習得している。留学先のリスボンで積極的に学んでいる様子を手記で綴り、送ってくれた。

V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

「スペイン / 中南米主題講義 D」では、人種やジェンダー、女性の状況について、ブラジル文学を通して考えた。そして、10月の第5回目の授業で、昨年度に続き、ブラジリア大学大学院文学部応用言語学専攻科長の向井裕樹教授による「ブラジルにおける人種問題とブラジリア大学における多文化共生について」と題した特別講義を行って頂いた。藤田唯奈さんが、向井氏の講義を踏まえて、日頃から感じている日本社会のジェンダー意識について執筆した。

京都外国語大学で開催される「全日本学生ポルトガル語弁論大会」は、11月中旬に第40回大会が開催された。森下莉紗さんは、ポルトガル語の校閲と発音についてホザンジェラ岩瀬マルチンス先生の指導を仰ぎ本番に備えたが、直前の体調不良で出場を断念した。大会への出場こそ叶わなかったが、出場までの経緯や発表予定であった内容について記事を書いてくれた。

また同じく11月に、学内の地域連携事業の一環で、焼津市立焼津図書館で「多言語読み聞かせ」を実施した。日本語、英語、ポルトガル語で絵本の読み聞かせを行い、ポルトガル語の絵本の日本語訳は、3年生のポルトガル語履修者が作成した。日本語教師養成課程を履修する学生もおり、子供たちに理解しやすい言葉を意見交換しながら選択した。焼津図書館で実際にポルトガル語による読み聞かせを体験した植松マユミさんが、今回の取り組みを「学内外での取り組み」に寄稿した。

12月には第9回多言語レシテーション大会が開催された。今回の大会では対話型の〔ペア部門〕が新設された。ポルトガル語の〔ソロ部門〕の課題文に用いられた詩は、ブラジルのロマン主義を代表する詩人ゴンサルヴェス・ジラス（1823-1864）が、ポルトガルのコインブラ大学で法律学を修めていたときに、遠く離れた祖国ブラジルに想いを馳せて書いた「流浪の歌」を用いた。〔ペア部門〕は、ボサノヴァの名曲『イパネマの娘』の作詞者として知られるヴィニシウス・ジ・モライス（1913-1980）の戯曲『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』を用いた。〔ソロ部門〕には高校生と本学1年生から3年生が、〔ペア部門〕には本学2年生から4年生が出場した。いずれの出場者も、課題文の暗記、発声による反復練習の成果、個々の解釈に基づく表現の工夫が見られた。また、〔ペア部門〕では、全ての出場者が長いセリフを完璧に暗記しており、パートナーに対する配慮や工夫も見られ、素晴らしい内容であった。

今年度のポルトガル語関連の活動は、際立って大きな取り組みを実施することはできなかったが、来年度も非常勤講師の方々の協力を仰ぎながら、ポルトガル語文化圏への関心を高める取り組みを継続してゆきたい。

ポーランドの芸術家たちがみるウクライナ

21122029 清水 理那

「スペイン/ラテンアメリカの文化」の授業で、小川万海子先生に「19世紀ポーランドの芸術家たちを魅了したウクライナの大地について」の講義をしていただいた。ラテンアメリカを中心に学んでいる私にとってウクライナは未知な地域であり、とても新鮮だった。講義では、小川先生のポーランドでの外交官としての経験や芸術から感じ取れるウクライナのアイデンティティについて学んだ。

ポーランドやウクライナはこのところよく耳にする国だが、どんな歴史・文化があるのか全く知らなかった。ポーランドでは18世紀末にロシア・プロイセン・オーストリアによって三国分割が行われ、武装蜂起が繰り返されていたため国家が存在していなかった歴史がある。そのため、ポーランドの文化や言語などのアイデンティティを守ろうと、ポーランド・ロマン主義が開花した。ポーランド・ロマン主義を代表する画家のヤン・マティコは「芸術は、今日の我々にとって手中の武器であり、芸術を祖国愛から切り離すことは許されない」と述べている。芸術についてあまり詳しくはないが、この言葉を聞いて、絵画も文学もその時代に感じる心の叫びを表わしていることを知り、芸術についてもっと詳しく知りたと思うようになった。

また、ポーランド・ロマン主義には、ウクライナを讃える芸術家たちも多くいる。私が特に印象的に残っている作品は、ユゼフ・ハウモンスキの『墳墓のあるステップの風景』だ。この作品に出てくる藤色の地平線は、ウクライナにとって欠かせない情景であり、「果て」に対する憧れと神への祈り、虚しさの思いが込められている。クルハンと呼ばれる墳墓も描かれており、果てしないステップは遊放



V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

民の道標になっていることを小川先生が解説してくださった。藤色の地平線は常にウクライナに寄り添うように見えるため、当たり前風景であったものをポーランドの芸術家が違う視点で描いていることが素晴らしく、興味深く感じられた。

現在、ウクライナではロシアとの戦争が続いている。このため、国外へ避難しているウクライナの人々がアイデンティティを喪失してしまう可能性がある。早急にウクライナ侵攻が終わることを祈るばかりだ。今回小川万海子先生の特別講義を聴いて、先生の言葉遣いがとても素敵だったので、私ももっと語彙を増やしたいと思った。このようなきっかけを作って頂いた江口先生にも感謝したい。



限られた時間の中で

19122088 村田 圭花

残り 171 日。リスボン空港で、ポルトガルの銘菓であるパステル・ジ・ナタのほり旗を眺めている時から、帰国へのカウントダウンは始まっていた。半年間の留学生活、時間は有限である。リスボンに到着する前、日本にいた時点で既に決まっていたことは9月の1ヶ月間「語学学校 CIAL」に通うこと（60時間）、10月から1月下旬まで「リスボン大学」に通うこと（200時間）だけであった。つまり残りの3,844時間の使い道は留学先のリスボンで決めることになる。日本を離れ、家族や友だちとも会うことができないのは留学ができたからである。この3,844時間で「どんな景色を見ることができるのだろう」、「どんな新しい出会いがあるのだろう」と胸を膨らませていた。有限である時間を無駄にしないようにするため、私は今回2つの挑戦をした。「ポルトガル語検定を受験すること」

と「リスボン大学の日本語クラスの見学」である。

【外国語としてのポルトガル語検定試験】(APLE: Avaliação e Certificação de Português Língua Estrangeira)

私が受けた A1(ACESSO)は日本では実施されないレベルであった。そのため、この検定を申し込むこと、合格するために勉強することは正しい時間の使い方であると考えた。リスボンに来て1ヶ月も経たない9月中に申し込みを始めたが、すでにリスボン、コインブラ会場は定員に達していた。幸いにもヴィゼウ(Viseu)会場に空きがあり、申し込むことができた。手続きはインターネットによるWeb申し込みであった。受験者の基本情報に加えて、ポルトガル語を学んだ機関や年数なども記入する必要があった。Web ページは全てポルトガル語のみで書かれており、1人で記入することに苦戦したため、語学学校 CIAL の先生に寄り添ってもらいながら申し込みをした。以下、検定の基本情報と受験した感想を述べる。

- 検定試験の時期：5月・7月・11月
- レベル：6段階 (A1: ACESSO、A2 :CIPLE、B1: DEPLE、B2: DIPLE、C1: DAPLE、C2: DUPLE)
- 試験日 :2022/11/8 (試験結果 :2023/1/09)
- 試験会場 :PORTUGAL -Viseu- Instituto Politécnico de Viseu - Escola Superior de Educação de Viseu.(Biblioteca)
- 検定料 :44€ (¥6,450)
- 試験スケジュール：
 - 14:30 ~ Produção e Interação Oraís (10-15m)
 - 15:30 ~ Compreensão da Leitura e Produção e Interação Escritas (40m)
 - 16:20 ~ Compreensão do Oral (25m)

◆ Produção e Interação Oraís (10-15m)

[スピーキングテスト] 人数：試験官＋受験者2人／時間：10分／採点：全体の30%

試験の中で一番この時間が緊張していた。スピーキングテストが行われる部屋

V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

に入ってみると実際の人数は、試験官1人、録画係1人、書記1人、受験者3人（私を含め）であった。受験者同士での会話はなく、常に試験官と会話をした。スピーキングテストは大きく2つのパートに分かれており、一つ目は「日常的によく聞かれる質問」であった。具体的には名前、職業、住んでいる場所、何をするのが好きか聞かれた。二つ目は「イラストの描写 & 質問」だ。受験者1人1人にそれぞれ異なるイラストが渡される。30秒間のイラストを見る時間を経て、できる限りイラストの描写をする。その後、そのイラストに関連した質問に答えた。人物の身体的特徴や形容詞、色、家具など、単語を見れば意味が分かるものの、実際に自分の口から発言することは難しかった。



スピーキングテスト：「イラストの描写・質問」実際の問題

スピーキングテストが終わった後、次の読解試験まで時間があった。一緒にスピーキングテストをした他の受験者と少し話しをしていると「あなたのポルトガル語はブラジルの発音だね！」と言われた。今回のポルトガル語検定は、ポルトガルのポルトガル語なので、私の発音で大丈夫だったか、不安になった。

◆ Compreensão da Leitura e Produção e Interação Escritas (40m)

[読解] 時間 :20分 / 採点 : 全体の20%

問題数の割に試験時間が短く、途中から焦りながら問題と格闘した。読解問題は大きく4つで構成されていた。一つ目は「対話にふさわしいものを選ぶ」である。例えば、Aさん、Bさんの2人が会話をしているA→B→Aの最後のAさんの発言を選ぶという問題や、要望に沿った文章で適切なものを選ぶ問題があった。二つ目は「小さな記事・広告・看板から情報を読み取り適切なものを選ぶ」である。これは斜め読みするようにして素早く文章を読む、要点をつかむことが必要であった。三つ目・四つ目は長文読解だ。時間に余裕があれば、もっと内容を理解した上で設問に答えられただろう。

[作文] 時間 :20分 / 採点 : 全体の15%

条件をもとに作文を2つ書く。1つ目の条件はメール文、友だちを夕食に誘う、

お店の場所を説明する、25語～35語であった。25語～35語で収めるために必要最低限の情報のみにしたつもりがオーバーしてしまったので、文章を削るのに苦戦した。2つ目は作文、朝・昼・夜の日常生活、時間も書く、150語であった。2つ目は日頃からよく使う表現が多かったなので、止まることなく書くことができた。

◆ Compreensão do Oral (25m)

【リスニング】 時間 :25分 / 採点 : 全体の 35%

リスニング試験が一番採点の割合が高いものの、この時はかなり疲れていた。設問の説明をしている間に選択肢に目を通すこと、ポイントとなる単語を聞き取ることを意識した。

私が受けた A1(ACCESSO)は公式ホームページに検定の過去問が掲載されていない。そのため試験前の対策時に「文法はどの範囲まで出るのか」、「スピーキングテストの形式はどんな感じなのか」と対策をしたくても何をすればいいのか、分からない状況であった。今、書いた検定の基本情報と受けてみた感想が次に受ける人の何か役に立てれば幸いである。A1(ACCESSO)以外はホームページにて過去問の閲覧が可能である。<https://caple.lettras.ulisboa.pt/>

【リスボン大学ー日本語クラスの見学】

1ヶ月間の語学学校 CIALでの学びを終えて、10月からリスボン大学の“66th ANNUAL COURSE 2022/2023”を受講した。私がポルトガル留学の中でリスボン大学を選択した理由は、リスボン大学に日本語クラスがあり日本語を学ぶ学生がいるからであった。リスボン大学にはアジア研究コースがあり、学生はアジア言語（日本語、中国語、韓国語など）を学ぶ。私は常葉大学で日本語教師養成課程を履修しており、週末は地域の日本語教室のボランティアをするなど、日本語教育に関心があった。

上記のポルトガル語検定が終わり、大学の授業にも慣れてきた11月中旬、日本語クラス見学に向けて動きはじめた。Centro de Associação de estudantes(学生会センター:リスボン大学の学生が運営する施設)に行き、日本語の授業がい

V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

つ、どこで行われるのか教えてもらった。私は留学生であり、リスボン大学の学生ではないため、授業の予定表やシラバスを持っておらず、リスボン大学の学生に訊く必要があった。どの学生も、私が求めていたこと以上の情報をくれた。リスボン大学には日本語クラスが Japonês I, II, III, IV の 4 つあり、日本人の先生 2 人によって授業が開講されていることを知った。初めての日本語クラス見学は教室探しに時間がかかってしまい 5 分ほど遅れて教室に入った。

「分かりますか？」という先生の投げかけに対し、「はい、わかります」と返事をする学生。真ん中の大きなスクリーンには、ひらがな、ローマ字とポルトガル語。私が初めて見学した日本語クラスは Japonês I であり、まだ日本語を学び始めて 30 時間も満たない初級レベルのクラスであった。常葉大学の日本語教師養成課程では、日本語のみを用いて授業をする「直接法」による授業を主に扱ってきた。一方、リスボン大学では日本語以外の言語を使って間接的に日本語を教える「間接法」であった。1 コマ 90 分の授業の中での使用言語はポルトガル語 8 割、日本語 1 割、英語 1 割であり、授業のほとんどがポルトガル語で行われていた。間接法による授業は学習者が理解できる言語で行われるため学習者にとって文法の説明を正確に理解しやすく、ストレスなく言語を学べる環境であることを改めて感じた。また、間接法によって授業ができるということは、教師側も授業で使う言語に精通している必要があると思った。見学中に生徒が文法に対して先生に質問をしていたが、私は生徒のポルトガル語を聞き取ることができなかった。間接法によって授業を行うためには、どこまでの言語力が必要なのか、身をもって知ることができた。今回、日本人の先生方の心遣いがあり、4 つの日本語クラスをすべて見学することができた。中でも Japonês I は 5 回ほど授業を見学し、口頭練習のグループワークではメンバーの 1 人として一緒に参加させてもらった。私のポルトガル語のレベルは高くなく、Japonês I の学生の日本語も初級レベルであったため、なかなか思うように会話を進めることは難しかった。しかし、自分の身を母語が使えないストレスに置くことでポルトガル語力はさらに向上させることができると思った。私はリスボン大学の学生との会話の中で幾度となくポルトガル語での表現に困ることがあり、話せないことに悔しさを感じることもあった。それでも何とか自分の知っている知識で表現することで、相手がわかりやすく表現し直してくれることもあり、さらに言えば、自分の持っている知識内で表

現する力も身に着けることができたのである。

授業の前後の休み時間には、話しかけてくれる学生がいた。「にほんのアニメがすきです。なにがすきですか?」、「Há uma loja de ramen em Lisboa」(美味しいラーメン屋さんがリスボンにあるよ)と、日本の文化や食べ物、習慣についての質問だけでなく、リスボンの観光地や美味しいご飯屋さんを教えてくれた。実際に住んでいる人からの情報は貴重であり、観光ブックには載っていないことまで知ることができた。交流の場は授業外まで広がった。一緒に和食レストランへ行ったり、綺麗なイルミネーションが見える場所に連れていってくれたりした。日本語クラスの見学は、限られた時間を充実した価値のある時間に導いてくれた。

最後に、叶えたかった「海外留学」という夢を大学生で実現することができて嬉しく思っている。日本にいただけでは経験することのできないこと、現地の人との優しさに触れること、実際に生活をして感じる事、人それぞれ感じ方は違うかもしれないが、どれも刺激的で自分の視野を広げる良いきっかけになる。留学から帰国したら、今まで挑戦してこなかったことに、たくさん挑戦してみようと思う。留学を通して得た力をこれからは、自分の武器として活かしていきたい。



イルミネーションを一緒に見た帰り道

「ふつう」ってなんだろう

20122049 藤田 唯奈

みなさんにとっての「ふつう」とは何ですか。男に生まれたらズボンを履き、男らしい物が好きで、家庭を持ったら仕事が役割になることでしょうか? 女に生まれたらスカートを履き、女性らしい行動をし、家庭を持ったら家事育児をすることでしょうか? 恋愛においては男と女が付き合い、結婚をすることでしょうか? 私たちは、生活していく中で、知らず知らずのうちに大多数の人が当てはま

V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

る方が「ふつう」であると認識していくのかもしれませんが。このような「ふつう」の基準を持っている人は、まだ日本には多いと 생각합니다。そして私自身も、自分の中の「ふつう」を持ってしまっているのだらうと思います。

私はジェンダー問題の「ふつう」について考えることがよくあります。1 番疑問を感じる瞬間は、性別欄の表記の仕方を見たときです。日々、様々な場面で私たちは性別を選択していると思います。私はその性別欄に疑問を持っていました。答える際に私たちは、「男」か「女」の 2 択に分かれなくてはならないからです。2 択に分かれるのが「ふつう」とされているからです。最近では、LGBTQ + を意識したもので、「その他」や「答えたくない」などの選択肢も見られるようになりました。しかし、これにも私は疑問を持っていました。同じ人間なのに「2 択に当てはまらない別の人」というように捉えられてもおかしくない書き方で、配慮が欠けていると感じるからです。

このようなモヤモヤを以前は頭の片隅で持っていました。そうして、真剣に考えるようになったのは、私が履修をしている「スペイン・中南米地域研究主題講義 D」で、差別やジェンダーについて触れるようになったからです。その授業に来て下さった、ブラジリア大学の向井裕樹先生の特別講義「ブラジルにおけるジェンダーと多様性」で、ブラジルは性別欄の表記の仕方が最近変わったということを知りました。生物学的な性別“sexo”の選択から、心の性別“gênero”の選択に変わったというものです。これは見た目の性別を気にすることなく、自分の気持ちに正直に答えることが出来るため、とても良い変化だと思いました。このように目に見えて変化が起こっているブラジルの方が、日本より進んでいると思います。

日本でもジェンダー問題は浸透しつつあります。以前よりは LGBTQ + に対して偏見を持つ人は減ってきているとは思いますが、まだ受け入れがたい人、自



分とは別の世界の話だと無関心な人が多いのではないのでしょうか。私はそのような考え方が少なくなると良いと思います。「ふつう」という基準は、本来はないはずですが、ただ、確かに大多数の人が当てはまる選択肢は存在します。しかし、自分の「ふつう」は他の人の「ふつう」ではない、大多数の人が当てはまるからといって、それが「ふつう」でないことは確かです。この考え方が当たり前になり、みんなが気持ちよく生きられる未来を望みます。

「歌の力」を通じて伝えたかったコミュニケーション

20122065 森下 莉紗

私は京都外国語大学で11月19日に開催された第40回全日本ポルトガル語弁論大会に出場する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの濃厚接触者になり、参加を辞退した。ここでは、本大会になぜ出場をしたかったのか、また、弁論大会で何を伝えたかったのかを述べたい。

まず、出場を決めた理由は、ポルトガル語学習を目的ではなく手段として使う経験をしたかったからだ。私は幼少期から極度のあがり症であるため、ポルトガル語でスピーチをすることに数カ月間迷っていた。しかし、ある経験を思い起こした。それは大学2年生のときに出場した学内での英語スピーチコンテストである。「周りと少し違うことをしたい」と以前から考えていたため、グローバルコミュニケーション学科から一人だけであったが、参加した。本番前は緊張していたが、いざ聴衆の前に立つと「壇上で楽しみたい」という気持ちになり、スピーチをやり切ることができた。私になぜ壇上で楽しむことができたのか。それは、子供のときから、楽器や歌での発表会や大会を経験してきたからだ。練習を積んだことは、その緊張を楽しみに変えることができる。

そのようなことを思い出すうちに、私が大学で部長をするアカペラサークルでの経験を話したいと思った。“アカペラ”というと、おそらく、歌い手と聴き手との関係が想像されるだろう。しかし、私が考えたのは歌い手についてである。歌い手に必要なのは、歌詞を身体に叩き込み、自分のものにする作業である。これが不十分であると、歌詞が口から空気中へ出るだけになる。つまり歌の中の言

V. 2. ポルトガル語圏（長期、短期、語学研修、その他）

業としての役割が薄れる。私が所属するアカペラサークルでは既存の楽曲を使う。歌詞を含めて、楽曲制作に関わった人の想いを想像した上で、自分なりの個性を追求する作業は困難だが、欠かすことができない。

高校の部活の恩師から、「“歌う”の語源は“訴う”だ」という言葉を言われたことを思い出す。私はこの言葉がとても好きで、歌うときにいつも思い出す。いくら技術のある歌い手でも、心から訴えようとしなければ相手の心には響かない。逆に、技術が多少足りなくても、強い訴えがあれば相手の心に近づくことができ、魅力的なものに成り得る。

サークルでは、5人がそれぞれ1つのパートを担当する。指揮者もボタン1つで始まるBGMもないため、5人ですべて足並みを揃える必要がある。「阿吽の呼吸」である。仲間割れが生じたら、メンバーで息を合わせることは難しく、聴き手にも伝わってしまう。大切なことはメンバーの関係性だ。

私が入部したばかりの頃、コロナ禍で部員に会える機会が少ない上に、顔も名前もよく分からない、ということがしばしばあった。「親しくないメンバーと曲を届けられるだろうか」と私は不安を抱いていた。1年程前に私はサークルの部長になった。私は部員同士の関係を良好にすることに努め、縦と横の関わりを増やすようにした。その結果、サークルに活気を取り戻すことができた。部員たちの笑顔や温かな繋がりを見ることができるようになった。前述したように、技術を磨くだけでなく、例え不器用であっても、言葉や相手への思いやりを持ち、互いに理解しようとする関係を構築することが重要である。技術だけでは壇上に上がっても鮮やかな色は生まれない。これは「弁論」という行為に対しても言える。歌うことの“訴う”は、相手に言葉を届ける弁論と同じだからだ。

弁論大会では「歌を通じたコミュニケーション」について発表する予定だった。自分の考えを伝えたいという想いは人一倍強い。だから、チャレンジしてみよう、と決心した。出場を辞退したことは悔しいけれど、アカペラサークルの部長としての経験、歌うということにもう一度向き合ったことを、次のステップにつなげてゆきたい。

3. 中国語圏 (長期、短期、語学研修、その他)

2022 年度の中国語圏における研修

若松 大祐

2021 年度も新型コロナウイルス感染症の蔓延のために、2020 年度は中国語圏での活動をほとんど実施できなかった。2021 年度は、on-line や学内で関係する活動をなんとか実施した。2022 年度は状況がやや好転し、海外留学を実施できた。

(1) 中国語圏での長期留学

	出発日	説明会	一学期	二学期	帰国日
高橋 南海	9/14 (水)		9/26 (月)～ 12/16 (金)	12/26 (月)～ 2/14 (火)	2/15 (水)
長谷川瑞季	9/14 (水)	9/23 (金)	9/26 (月)～ 12/16 (金)	12/26 (月)～ 3/24 (金)	3/28 (火)

研修場所：銘伝大学華語訓練中心

(2) 中国語圏での語学研修

新型コロナウイルス感染症の蔓延のために、実施できなかった。また、on-line 語学研修の参加者もいなかった。2023 年度は、銘伝大学での語学研修を当地での対面と静岡からのオンラインの双方で実施する予定である。

	研修先	時期	内容	参加者
(担当：若松大祐) 海外中国語研修	銘伝大学華語訓練中心 (on-line)	2022 年 8 月 8 日 (月)～26 日 (金) の 3 週間 授業時間 (台湾) : 9:30～12:00 または 13:30～16:00	<ul style="list-style-type: none"> 授業時間数：2.5 時間 / 日、週 4 日 (月から木)。 金曜日にバーチャルツアー 2 時間 / 回。 総学習時間：36 時間。 レベル：初中級 	0 名

V. 3. 中国語圏（長期、短期、語学研修、その他）

(3) 中国語圏での臨地実習

毎年3月に約10日間の臨地実習Bを、中国福建省漳州市にある閩南師範大学で実施している。しかし、2022年度（2023年3月）は、新型コロナウイルス感染症の蔓延のために、実施できなかった。3年連続で実施できていない。代わりに、昨年に続き、下記の課外活動を実施した。

	研修先	時期	内容	参加者
（担当：戸田裕司） 課外活動	閩南師範大学日本語学科の「中国文化」	2022年10月～12月	前期と後期に、グループごとにSNSでon-line交流を行う。	14名
（担当：戸田裕司） 課外活動	閩南師範大学日本語学科の「中日企業文化比較」	2022年10月～12月	常葉の学生がon-lineでプレゼンテーションを行い、質疑応答した。	3名＋卒業生1名

(4) グローバルコミュニケーション学科の報告会

グローバルコミュニケーション学科では、人間力セミナーの時間を使い、「海外語学研修報告会」と「学生海外活動報告会」を毎年実施している。2022年度は年度内での海外渡航が十分に実施できなかったため、下記のような報告を実施した。

・学生海外活動報告会

日時：1月18日（水）2時限

場所：A301 教室

題目：台湾留学報告

報告者：高橋南海、長谷川瑞季

高橋と長谷川は、上記(1)で言及しているように、常葉大学の派遣留学生として台湾の銘伝大学華語訓練中心で中国語研修を行っている。生活環境のみならず、

留学を通じて体感した日台の生活習慣について紹介した。

(5) 私費留学

南部文香が、2022 年 8 月 20 日（土）から台湾に滞在し、国立台湾師範大学国語教学中心 (Mandarin Training Center, National Taiwan Normal University) において私費での中国語研修を行った。2023 年 2 月末に日本へ帰国する予定である。なお、一時帰国中の 2022 年 10 月 20 日（水）には、若松の担当する講義「国際関係論 B」で、台湾での生活状況を報告し、受講者と意見交換を行った。

4. 韓国語圏（長期、短期、語学研修、その他）

2022 年度の韓国語圏での研修の実施報告

崔 慶原

(1) 長期留学

コロナパンデミックによって見送られてきた長期留学を再開した。4名の学生（グローバルコミュニケーション学科の4年生1名、3年生2名、2年生1名）が、2022年9月末から2023年2月末まで、協定校の慶熙大学に滞在しながら、現地での学習に取り組んだ。

(2) 語学研修

韓国語語学研修は、従来、夏期に実施してきた。しかし、韓国側の受け入れ再開時に韓国への渡航者が急増したことでビザ取得が間に合わず、実施期間を春期に延期せざるを得なかった。2023年春実施分に対し、学生16名（グローバルコミュニケーション学科の3年生2名、2年生12名、1年生4名）が応募している。2023年3月6日から24日まで3週間、協定校の慶熙大学で実施される。

(3) オンライン交流：水原の大学生とのオンライン交流

- ・ 時期：春学期（5～7月）
 - ・ 参加校：韓国（水原市の大学）／日本（常葉大学）
 - ・ 参加者数：春学期（水原市の大学生12名・常葉大学の学生12名：グローバルコミュニケーション学科10名、造形学部1名、教育学部1名）
 - ・ 形式：zoom使用／日韓各6名の混合チームで交流：毎回1～2時間程度の話し合いを共通テーマで2回と自由テーマで3回実施
7月27日にチーム別交流の成果を共有する報告会を実施
- * 共通テーマ
- ① 大学生活、最近の関心事（各自関心を持っていること）
 - ② ニューノーマル、コロナパンデミック以降の社会経済の変化と対応

5. 上記 5 言語以外の言語圏

担当：増井、江口、三村

GC 学科では「人間力セミナー」において、GC 学科生による学内外での体験報告会を実施し、学生の語学学習の意欲を高め、グローバル社会で活躍する意識を育む良い機会となっている。

【2022 年度 G C 学科 海外語学研修体験報告会】

【1】日時：11 月 2 日 10:45-12:15 (人間力セミナー第 8 回)

【2】教室：A301 教室

【3】報告：

1. 海外語学研修体験者による報告

① 2019 年度夏期韓国語学研修 19122087 武藤真実

② 2019 年度春期スペイン語学研修 19122053 鈴木悠人

2. 2022 年度「臨地実習 B」参加者による報告：

箱根におけるフィールドワークとインターンシップ (近畿日本ツーリスト)

22122033 杉山実乃梨、22122037 鈴木理央菜

【2022 年度 G C 学科 学生海外・学外活動報告会】

【1】日時：1 月 18 日 (水) 10:45-12:15 (人間力セミナー第 15 回)

【2】教室：A301 教室

【3】報告：

1. 外国語学部認定長期留学生によるオンライン報告

① リスボン大学 (ポルトガル) 19122088 村田圭花

② 銘傳大学 (台湾) 19122055 高橋南海、21122051 長谷川瑞季

③ 慶熙大学校 (韓国) 19122065 中村真那、20122021 倉島あい子

20122039 関晴香、21122014 大代美空

2. 2022 年度「臨地実習 A」参加者による報告：

はあとふる Yaizu 2022 での活動

21122005 安間友奏、21122034 鈴木桜子、21122043 堤彩華

V. 5. 上記 5 言語以外の言語圏

22122001 青木めぐな、22122005 池村祐希、22122009 大木萌々華
22122014 落合優音、22122018 久保山愛菜

VI 卒業生

卒業生

卒業生の声を聞く

外国語学部言語文化研究会は、機関誌『とこはことのは』を発行している。目的は、外国語学部に所属する教職員と学生が、1年間の活動を振り返り、考えていることや感じていることを自由に披露するところにある。実は卒業生も構成員に含まれているのに、これまで卒業生が機関誌に登場することはなかった。そこで、33号(2020年3月)から卒業生に投稿を募り、33号には2人の、35号(2022年3月)には3人の寄稿があった。このたびの36号(2023年3月)には、2名の文章を収録できた。『とこはことのは』は、より多くの卒業生の投稿を待っている。(若松 大祐)

現役学生から学ぶ日々

石間 海帆

2018年3月卒業

静岡草薙キャンパス キャリア支援課

2018年に常葉大学外国語学部英米語学科を卒業し、3年間民間企業に従事したのち、縁あって母校である常葉大学に事務職員として戻ってくることが出来ました。現在は草薙キャンパス A 棟の2階にあるキャリアサポートセンターで、学生の進路や就活に関する業務に携わっています。

キャリア支援の業務では、学生の進路相談に乗る機会が多くあります。雑談の中で、学生から「今の時代のトレンド」や「今の学生の価値観・考え方」など学ぶことがたくさんあるのです。自分自身は常葉大学を卒業して、まだ5年しか経っていないと思っていました。しかし、その5年間で世の中のトレンドは大きく変わり、学生が企業に求めるものに変化が生じています。今後も学生からアイデアや知識をもらい、常に自分をアップデートしていくことを目標に、日々業務に取り組みたいと考えています。ぜひ外国語学部 OB のいるキャリアサポートセンターへ、気軽に足を運んでみてください。

社会人になってからの貴重な経験

鈴木 美央里

2018年3月卒業

外国語学部英米語学科を卒業し、就職してから2年間は、外国語とは関係のない仕事を行っていました。社会人3年目になる頃、英語を使う機会があるかもしれないとのことで、新しくオープンする商業施設を立ち上げるためのメンバーになり、新しい部署へ異動します。

社会人経験の浅かった自分にとって、店舗の立ち上げ業務は全てが初めての経験です。決まったマニュアルもないため、どのようにしたら仕事が効率よく進められるか何度も試行錯誤しました。

そして、立ち上げ業務の中でも特に思い出に残っているのは、施設内に設置するアトラクションの映像の英語訳を、同僚とともに作成したことです。完成したアトラクションの映像を初めて見た時は、自分が少しでも力になれたことを感じ、感動しました。社会人になってからこのような貴重な経験ができるとは思っておらず、一生の記憶に残る経験ができました。

商業施設は無事に2年前にオープンしました。コロナ禍にある今、外国からの観光客はまだまだ少ないのです。これから観光客数が少しずつ増えてきて、たくさんの方に楽しんでいただきたいと願っています。

VII 退職者

長年にわたって御指導くださり、
ありがとうございました。

Ⅶ. 退職者



清 ルミ SEI Rumi

教授

所属：外国語学部

学位：博士(文学)

学歴

2008年 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士後期課程

主な経歴

1985年～1987年 米国国務省日本語研修所 専任教官
1988年～1992年 産能短期大学 兼任講師
1988年～2012年 日欧産業協力センター H RTP プログラム 日本語文化研修責任者
1992年～1998年 早稲田大学 国際部 講師
1998年～2002年 常葉学園大学 外国語学部 助教授
2003年～ 常葉学園大学 外国語学部 教授

専門領域(分野)

異文化コミュニケーション学、日本語教育学

研究テーマ

■ 異文化接触時における対人コミュニケーションについて

主要な研究業績・社会活動実績

- 『気持ち伝わる日本語会話基本表現180』 清ルミ Jリサーチ出版 2016年
- 『ことばのおもしろ事典』 分担執筆、中島平三(編) 朝倉書店 2016年
- 『食のとらえ方のパラダイムシフトを求めて－アールヴェータを照射版として』 『日本の食の近未来』 熊倉功夫(編) 思文閣出版 2013年
- 『異文化コミュニケーション事典』 編集、分担執筆、春風社 2012年
- 『ナイフとフォークで冷奴－外国人に理解できない日本人の流儀』 清ルミ 太陽出版 2008年
- 『優しい日本語－英語にできない「おかげさま」のこころ』 清ルミ 太陽出版 2007年



鈴木 克義 SUZUKI Katsuyoshi

准教授

所属：外国語学部

学位：修士(MA-TEFL)

学歴

1990年 米国ペンシルバニア州立ウエストチェスター大学大学院 修士課程 TESL 専攻

主な経歴

1980年～1988年 神奈川県立野庭／港南台高等学校 教諭
1988年～1990年 ウェストチェスター大学外国語学部 日本語講師
1990年～1998年 香蘭女子短期大学国際教養科講師・助教授
1998年～2004年 常葉学園短期大学／富士常葉大学 助教授
2004年～2019年 常葉学園短期大学助教授、2005年より教授
2019年～ 常葉大学 外国語学部 准教授

専門領域(分野)

観光英語、メディア英語、保育英語、ディベート、国際バカロレア

研究テーマ

■ 外国人ツーリズムによる地域振興、国際バカロレアを導入した幼小連携英語教育

主要な研究業績・社会活動実績

- 「勝者のディベート」(鈴木単著) 富士通経営研修所、2000
- 「英語で語る日本の争点」(茂木秀明と共著) 金星堂、2002
- 「心を動かす英語」(鈴木単著) 三修社、2003
- 「リアル・プリティッシュイングリッシュ」(Tim Letheren と共著)三修社、2004
- 「英語は小学校からでは遅すぎます」(鈴木単著) 幼年教育出版社、2010
- 「富士山静岡空港は本当に赤字か」(鈴木単著) 常葉学園短期大学紀要、2010
- 山梨県高校英語ディベート大会審査委員長、2018
- 「国際バカロレアと英語イメージンによる幼小一貫教育」(鈴木単著) 常葉大学教育学部紀要、2020

鈴木克義先生は、令和5年1月27日に永眠されました。ここに心からの哀悼の意を表すとともに、ご冥福をお祈りいたします。

(外国語学部教員一同)

Ⅶ. 退職者



柴田 里実 SHIBATA Satomi

准教授

所属：外国語学部

学位：修士(英語学)

学歴

2004年 名古屋学院大学 外国語学研究科 修士(英語学)

2012年 関西大学大学院 博士課程後期課程(満期退学)

主な経歴

1995年～2002年 (株)中部ジオス

2005年～2008年 名古屋学院大学 外国語学部 英米語学科 任期制講師

2008年～2011年 常葉学園大学 外国語学部 英米語学科 任期制講師

2011年～2012年 常葉学園大学 外国語学部 英米語学科 講師

2012年～2015年 常葉大学 外国語学部 英米語学科 講師

2015年～ 常葉大学 外国語学部 英米語学科 准教授

専門領域(分野)

外国語教育学、応用言語学

研究テーマ

- 自律学習支援のための環境整備、インプット量増加のための英語多読の在り方
- 英語教育における絵本の活用の可能性

主要な研究業績・社会活動実績

- 平成28年度～静岡県英語指導力向上事業 外部専門講師
- 外国語教育メディア学会中部支部 副支部長(2016年～)
- 『多聴・多読マガジン』『多読多聴的読書ガイドYA』『多読多聴的読書ガイド、絵本』連載(2016年～)
- 『小学校英語教育－授業づくりのポイント』ジエース教育新社、「第10章 教材研究を通して教員自身の英語力向上を目指す」(pp122-131) (2015年)
- 「大学での英語多読実践で年間100万語を読ませる」『教室文化』日本多読学会紀要第8巻(2015年)

VIII 外国語学部言語文化研究会

『とこはことのは』36号の編集の現場

2023年2月7日(火) 10:00-17:00に草薙キャンパス A520教室で、教員3名と学生4名が『とこはことのは』の編集(初校)を行いました。



後列左から、有富、那須野、若松 前列の左から、佐々木、服部、米津、小泉

校正作業をするのは初めてであり、とても緊張した。客観的に原稿を読み、読み手に伝わるか、執筆者自身の伝えたいことはなにかを考えるのが、困難であった。そして、普段から自身の書く文章は、果たしてそこまで考えて作成しているのかと省みた。

また、作業中に気になって言葉の意味や使い方を調べたことは、自身の文章力向上にも繋がっていだろう。短時間であったものの、校正作業では多くの学びを得て、良い経験となった。(小泉杏果)

このたび『とこはことのは』の編集補助を担当し、貴重な時間を過ごすことができました。常葉大学に入学して、1年が経ちます。しかし、まだまだ知らないことだらけです。編集補助を担当し、外国語学部の教職員と学生の取り組みや努

Ⅷ. 外国語学部言語文化研究会

力を知ることができました。

4月からは、常葉大学に通い2年目に入ります。外国語を学び、さらに人間社会というものへの理解を深めるために、たくさんの挑戦をしていきます。(佐々木智)

入学してから、大学の行事に参加してきたと言い難い。そのため、今回、編集補助に携わることができ、うれしく思う。『とこはことのは』に収録される文章には、執筆者の感想や経験が綴られ、執筆者その人の人柄が表れる。2022年はあつという間に過ぎてしまったものの、『とこはことのは』に寄せられた文章を読み、自分自身の大学生活1年目を振り返ることができた。改めて、良い環境で貴重な体験の連続だったと感じている。これからも語学の学修に励み、周囲の人々への感謝の気持ちを忘れず、多種多様な文化や価値観に触れていきたい。(米津小智)

今回、興味本位で編集補助として参加した。想像以上の刺激を受け、貴重な経験になったといえる。作業をしているうちに、普段は見たことのなかった情熱や志など、外国語学部の人々の新たな一面を知ることができた。教員や学生の体験談を編集することは、大学に入学してからの忙しい日々を私自身が一度立ち止まり、改めて振り返る契機となった。『とこはことのは』は、外国語学部での学びが凝縮された機関誌である。外国語学部の学生だけでなく、さらに多くの人々に読んでいただきたい。(服部未由羅)



編集後記

『とこはことのは』をはじめ、冊子の編集や文学作品の審査といった仕事に、昨今たずさわる機会がある。編集や審査の作業で楽しいと感じる瞬間は、顔を知らない書き手の文章を味わいながら、その書き手がどんな人物なのかと想像を巡らす時である。力強さ、しなやかさ、美しさ、大胆さ等々、言葉で紡がれた文章には、その書き手の人柄が多少なりともでるものではないだろうか。今回の編集作業においても、様々な文章に触れることができた。学生から寄せられたエッセイには、荒削りな文体の中にも、体験で得た学びがストレートに表現されているものが多くあった。ただ、書き上げた文章を見直すという作業がなされていないものも見うけられた。良い文章を書くコツは、自分の文章を過信せずに、少し寝かせて見直すことである。また、多くの良質な文章を読むことも大切だろう。来年も多くの方の『とこはことのは』への寄稿を期待している。(那須野絢子)

2020年春から新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延が本格化し、私たちの生活が大きく変わった。コロナ禍の3年目にあたる2022年度は、夏ごろから海外への渡航が少しずつ可能になった。かくいう私も8月から2か月間にわたり、台湾に滞在した。2年半ぶりの台湾訪問である。こうした変化のために、外国語学部にとってのイベントも増えて、『とこはことのは』への寄稿も増えるかと思いきや、コロナ禍での34号(2021.03)の185頁や35号(2022.03)の172頁に比べ、36号(2023.03)は132頁というように、寂しい結果である。

2023年1月下旬に日本政府は、2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症を、感染症法上の2類から5類へ引き下げるという決定を下す。コロナ禍で浮き彫りになった問題の多くが解決しないままではある。とはいえ、人々が国境をまたぐ機会は大いに増えるだろうから、2023年度はたくさんの投稿があることを願っている。(若松大祐)

とこはことのは

第 36 号

2023 年 3 月 10 日

発 行：常葉大学 外国語学部 言語文化研究会

代 表：戸田裕司

編集委員：若松大祐（委員長）、有富智世、市川真矢、那須野絢子

連絡先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号

常葉大学外国語学部『とこはことのは』編集委員会

TEL (054) 297-6100[代表], FAX (054) 297-6101[代表]

<https://www.tokoha-u.ac.jp/language/publication/>

ISSN: 2435-8851

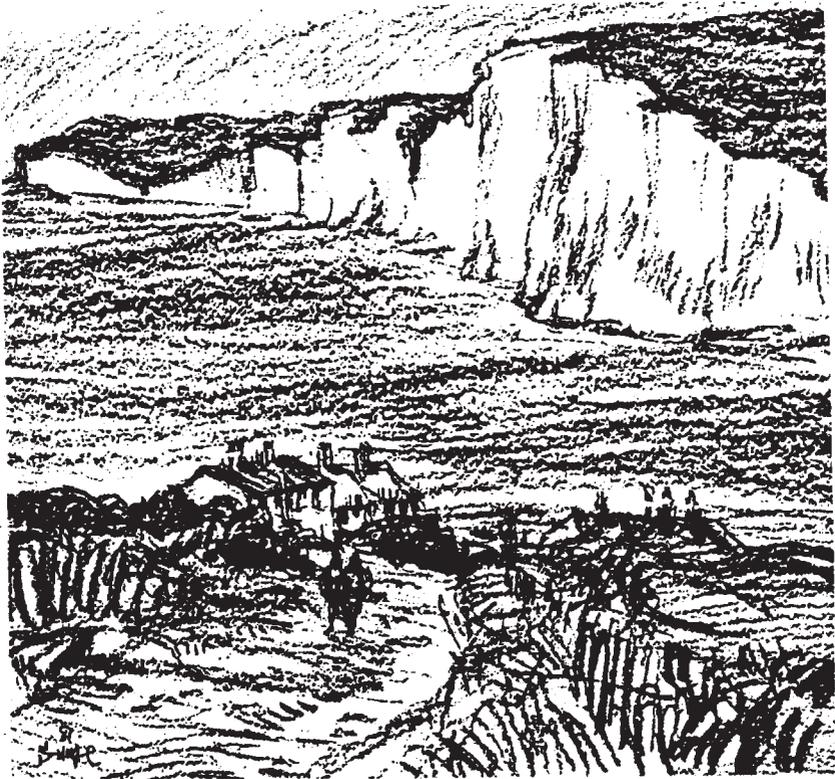
印刷製本 株式会社 篠原印刷所

〒 422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 - 5

TEL (054) 286-5141

旧 題

Albion



ドーヴァーの白壁

題字は諏訪卓三（元学長）による。扉絵の作者は不明。